

# とある個体の方向転換

一方通行に健康な食事を食べさせ隊

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

自<sup>分</sup>分<sup>シスターズ</sup>ミサカは妹<sup>達</sup>の中で一番と言って良いほど異<sup>イレギュラー</sup>質<sup>レター</sup>でしたと、自<sup>分</sup>分<sup>ラストオーダー</sup>ミサカは一方通行や打ち止め<sup>に昔話をします。</sup>に昔話をします。

・ハーメルンでとあるシリーズの二次創作を漁っていたら、凄く続きが気になるのに更新が一二年前の作品を見つけてしまい、内容は違うが最初の設定が似ている作品のネタが降ってきたので書きました。

・作者自体はとあるシリーズを最近知った人間なので、ネット上で設定やらストーリーをあらかじめ調べて書いているのですが、何か違うなーと思っても…作者がとあるシリーズを知らないことで生まれた人生の損に免じて見逃してくださいお願いします。

・主人公が転生または転移や憑依したわけではありません。何だったら原作でちゃっかり出てくる予定のキャラです。なのでオリジナールではありません。

・最初主人公に対して色々ツツコミどころがあるかもしれませんが、一応作者が調べて許容できるかと思った設定のみを主人公に盛り込んであります。科学的な内容をわざわざ調べてチベスナになって一日使った馬鹿は作者です。

・ネタバレとかではなく作者自身の頭が現在とある本編の旧約までしか追い付けていないので、キリが良いところで日常編みたいになります。とりあえず本編兼主人公視点を先に終わらせますが。

・続かないかもしれない。：続かないかもしれない(二度目)。大事なことなので二度繰り返ししました。

【<https://syosetu.org/novel/269993/>】

→上記のリンク先の作品はこの作品と作者がリスペクトしている小説です。

## 目次

### 13577号の独白

方向転換した理由	1
とりあえずの方向転換	4
本格的な方向転換で落とし穴 とある独白の一水四見	6
一方通行な激情を向けられる	8
一方通行な悪意と悪夢の始まり	16
一方通行な感情と出会い	19
一方通行な可能性と理解	23
後先考えずに方向転換	26
方向転換する先の障害物	29
方向転換しながら深く感情を知る	33
方向転換したら高校生と会う	38
方向転換で見逃しそうな闇?	42
一方通行な心情とX	46
一方通行な苦悩と現実	51
方向転換をしたことで始まる異変	58
一方通行な恐怖と内通	65
方向転換したら未元物質と街角衝突	73
方向転換して、弱音を吐きたくなる	78
ここまでの設定&場面整頓(一部本編&原作ネタバレあり)	88
一方通行な行動に心配と興味	95
方向転換しても、変えられない手のひら	98

方向転換して眺める先の能力者

一方通行なレールの終点

方向転換するキツカケと救いの手

126 111 104

## 13577号の独白 方向転換した理由

初めて13577号の自我が生まれたのは、身体年齢が5歳を超えた辺りが最初でした。

一番のキツカケは身体年齢が14歳に至った時です。

布束砥信が監修した、視覚・聴覚・味覚・嗅覚・触覚の五感全てに対して電氣的に情報を入力する機器、学習装置のレベルを身体年齢に合わせて調整する時でした。

13577号の担当者であり、学習装置の監修を行った布束砥信によつて調整が成され、本来であれば13577号と接している必要のない時間へ切り替わる時でした。

調整の際、13577号はさまざまな機器に繋がれていて、頭への負担が多くなり目線は低いです。

けれどその時、13577号の担当である布束砥信と初めて目線が合いました。

「Forever 13577号は調整している人を見ているのね、  
But 私はジロジロ見られることが好きじゃないの。  
That's why やめてくれないかしら」

学習装置で“怒られる”という感情表現を学んではいましたが、それを体験したことはありませんでした。それに学習装置があるといえど、与えられる知識に限度がありました。御坂美琴のクローン体、通称妹達と呼ばれている個体のほとんどに、必要のない軍事知識がありました。

本来13577号や妹達は、一方通行の絶対能力進化計画の為に犠牲者として今もなお製造されています。しかしその計画で犠牲者が軍事知識を持っている必要はありません。けれどその必要のない知識は、消されることなく残っています。

だから13577号はその軍事知識を利用することに、他の妹達との差や13577号の存在価値を見出せるのではと考えました。理由または原因としてあげられることは、13577号の異質な姿にありました。

オリジナルである御坂美琴の髪色や眼球の色とは異なり、赤みを帯びながら背中の中央まで届く黒髪とアルビノとも思える程の鮮やかな紅色の目は、他の妹達からも一際目立っていました。

他の妹達と同じ製造方法の筈なのにも関わらず、突然変異生物やウイルスがもつ遺伝物質の質的・量的変化という形で13577号を構成しているほどんが変異していたのです。

声帯・骨格・体質・髪質・身長といった身体情報の八割が変異したことは、今でこそ良いことだったと捉えてくれてる人がいるので気にしていませんが、当時の13577号は良くなかったことだと感じていました。それで、13577号の一人称を取り繕った程でした。

「自分は担当者である布束砥信を観察することも学習ですと、自分は布束砥信を心配していることを隠します」

13577号が計画に組み込まれていた一方通行の絶対能力進化計画の規模は大きく、その分13577号という異質が生まれたことは担当者である布束砥信の足を引っ張ってしまいました。

13577号の收容されている部屋の扉の向こうから時折、布束砥信への他研究者からの罵倒が聞こえていました。最初は知識が足りず、理解できないままでした。

13577号が製造され始めて一週間が経過する時に、扉の向こうの声と布束砥信が言い争っているのを聞き取ってから、布束砥信にとつて13577号が足手まといになっている現状に気付きました。

布束砥信が監修した、視覚・聴覚・味覚・嗅覚・触覚の五感全てに対して電氣的に情報を入力する機器、学習装置は13577号にある言葉を入力しました。

“出る杭は打たれる”、つまりこの場合での出る杭は13577号

でありながら布東砥信で、それを打とうとしているのが他研究者達だと真に理解したのです。



## とりあえずの方向転換

13577号<sup>分</sup>は必死に存在価値を探しました。発電能力系でありながら、オリジナルより劣っている欠陥電気能力的にはオリジナルの1%にも満たない程度、実力は2万人集まってもオリジナルに敵わない程度をレベル3よりのレベル4まで上げました。

しかし、レベル4に至ったのはあくまでも先端科学技術で再現できない現象を起こしているからであり、戦闘で使えるかも怪しい13577号<sup>分</sup>の欠陥電気<sup>レディオノイズ</sup>による一時的な移動速度の加速は、

一度や二度繰り返した程度で足の神経が強く痛んだり、トランス状態通常とは異なった意識状態になってしまうことで戦闘すらままならないという結果に至りました。

13577号<sup>分</sup>は必死に存在価値を探しました。“ミサカネットワーク”と呼ばれる妹達特有の情報共有能力を使い、情報の共有を図りました。

しかし、運が悪いことに13577号<sup>分</sup>は欠陥電気<sup>レディオノイズ</sup>のレベルを上げた後だった為か、それ以降身体が欠陥電気の影響で全身から微弱な電磁波を発せなくなり、13577号<sup>分</sup>より上位の個体でなければ命令を受け付けなくなる程に脳波の質が変わってしまいました。

13577号<sup>分</sup>は焦りました。  
一方通行の絶対能力進化計画に存在が組み込まれてしまっている以上、当時の13577号<sup>分</sup>にできることはもう絶対能力進化計画で一方通行に削除<sup>殺される</sup>されるしかありませんでした。

それ以外で13577号<sup>分</sup>の存在価値を上げ、布束砥信の功績にできることは思い付きませんでした。

けれど愚かなことに13577号<sup>分</sup>は布束砥信という育て<sup>科学者</sup>親を見て、学習装置から入力されなかった何かを学ぶ度に、“一方通行に削除<sup>殺される</sup>される”という13577号<sup>分</sup>が持っていた最初の存在価値すら否定しそうになりました。：今ならあの時の、13577号<sup>分</sup>の内側がよく理解できます。

しかし十四日<sup>成長期間</sup>の期間を過ぎ去った以上、オリジナルと同じ状況とは

言えなくとも13577号自分は一方通行アクセラレータに立ち向かうことを必要とされ  
れました。当然学習装置テストタメントによって軍事知識を入力されているとはい  
えど、指示も方法もありませんでした。

「Oh ああ already もう 大丈夫? That's だ why か 一緒に来  
ないでって言ったのに…、自業自得よ」

某日、布東砥信の反対を振り切って貴方の…一度目の一方通行アクセラレータに  
削除殺されされる妹達を、その実験の様子を13577号自分の目で見ました。  
…あまり具体的に思い出したいくないので、説明はできません。

ただ、圧倒的な力にこの先13577号自分も削除殺されされた妹達のよう  
になるのだと、…理解していたとはいえど精神的なショックはかなり  
あつたと記憶しています。

その実験を見て得られたものは一方通行貴方が圧倒的な力を持って  
いて、到底13577号自分の持つ知識や能力で敵うものではないことでは  
ない。

だからでしょうか、あの時から…何だか対面で会ったことのない  
一方通行貴方に対して反抗的に思うようになったのは…いえ、きっと  
135777号自分が詳しく知ることは出来ないでしょう。

## 本格的な方向転換で落とし穴

13577号<sup>自</sup>は純粋な力量では一方通行<sup>方</sup>にも勝てません。どこを取っても一方通行<sup>方</sup>と戦って能力以外を使わせることも出来ない、という<sup>自</sup>ことを13577号<sup>分</sup>の心<sup>内</sup>の中では否定<sup>側</sup>したくても、学習装置<sup>テストメント</sup>による情報の入力を受けた頭は冷静でした。

しかし、だからと言って一方通行<sup>方</sup>と戦って勝つことが出来なくとも、その戦いが13577号<sup>自</sup>にとつて勝利と言えるような結果を目指すことは諦めませんでした。オリジナルと同じ身体能力、さほど強いと言いつても切れない異能、それだけで“勝てない”と頭では理解していません。

けれどそれは机上の空論机の上や頭の中で考えただけの、実際には役に立たない意見や考えのことだ、と13577号<sup>自</sup>という異質<sup>イレギュラー</sup>が証明してました。

いえ、証明できるかもしれない可能性があるだけで前に進めませんでした。それだけで、13577号<sup>自</sup>は一方通行<sup>方</sup>に削除<sup>殺される</sup>されることも…そうですね、オリジナルや一方通行<sup>方</sup>のように言いつて許される存在であれば、“恐ろしく”ありませんでした。そう、言うのかもしれませんが、だから13577号<sup>自</sup>は足掻きました。

一方通行<sup>方</sup>に勝つ為に少々卑怯な手段を学び、作戦を練り、寝る間を惜しんで考えました。布束砥信に知られれば、二度と外出許可を貰うことは出来なくなると分かっています。

それに一方通行<sup>方</sup>も知っている通り、だいぶ…いや、考えたのは13577号<sup>自</sup>ですが、今思ってもかなり投げやりな作戦だったと自負しています…。

あ、打ち止め<sup>ラストオーダー</sup>は知らなくて良いんです。というかお願いなので知らないでください。アレはもう、13577号<sup>自</sup>の反省すべき過去だと、あの…理解しているの、気になってもこれ以上は…うう。

それとあの時の13577号<sup>自</sup>は、相対する敵である存在<sup>アクセラレータ</sup>…一方通行<sup>方</sup>、つまり一方通行<sup>方</sup>に13577号<sup>自</sup>が行った作戦について言及された上に激怒されたことに驚きました。

…理由、ですか？……そう、ですね。一方通行は多くの実験の最中に時折妹達シスターズや相対する敵に対して過激な発言RかGの年齢制限が付くような発言が多く見られました。13577号自も口に出すのが恥ずかしいので、言いはしません。ただ、一方通行アクセラレータの性質や予想年齢から一方通行貴方があのような言動をする、ということは一定のせい

…くつ、な……なな……。何を、…一方通行アクセラレータ、……一方通行貴方…正気、ですか？

ま、満更じゃなさそう…とか、つそ…それ以前の問題だということですよ！

ああ、あり得ません…お、おお、オリジナルに何と…何と説明すれば…!!

つそのまま言えば良いって問題ではありません!!

13577号自にも“羞恥心”という概念がやつと芽吹いたというのに…!!!

うああ…!!粘膜接触自身の粘膜と他者の粘膜を接触させることとしてしまったと言っても、オリジナルにバレない自信があ…!!!

お、オリジナルに卑屈と言われてしまった13577号自になんて無理ですうう…!!!

い、嫌です揶揄っている一方通行貴方はかなり悪質だったと13577号自は覚えていますから!!!

顔は隠しますズルではないですズルだと言うのであればあ、一方通行貴方は不意打ちでした!!!

ノーカンではないですあ、あれがノーカンであったのなら13577号自のあれは初めてではなかったということではない!!!

## とある独白の一水四見

### 一方通行な激情を向けられる

物心付く頃から、我ながら恵まれた幼少期を送っていた。

学園都市から施された強力な異能に、それを理解してくれた両親。残念ながら原石と呼ばれる部類ではなかったが、髪が白くなったり目が赤いのはカツコよくて好きだった。

俺はまだ、異能の力に名前を付けていなかった。

身の回りの奴らは安易に名前を付けて、ガキらしく目を輝かせてた。

俺は異能自体の力が、矢印ベクトルのようなものを変える力だと、しばらくすれば容易に理解できた。

ふと気になって、他の子供と鬼ごっこをしている時に異能を使った。

よくやる“バリア”ってやつを、再現できるのではないかという好奇心でワクワクした。

けど、それをやることによって何が起きるのか、俺は予測できていなかったんだ。

「へへっ、”——”捕まえた！」

そう言っただけで突っ立っていた俺へ向けられた手のひらが、何も無いところでやんわりと止まる。“成功”、その二文字が俺の頭に浮かんだ。

俺がポーツとしていたことで鬼役の子供の手のひらのスピードは遅く、ある程度手加減されていた。ただ、当然鬼役の子供は俺が捕まえられることにおかしく思ったのか、何度も何度も小さな手のひらを俺に伸ばそうとした。

けれどその手は一定のところでは止まる。

そのことに子供は段々と不機嫌になって、ついにその手を上げた。

「ズルいぞ——」っ!!!」

その子供は発火能力パイロキネシス持ちで、ことあるごとに異能を使ったがって周囲の大人に叱られていた。

しかし、性懲りも無く大人が見ていないところで異能を使って枯れ葉を燃やして、ボヤ騒ぎを起こしたことがあった。

「うわああああん!!!」

気付けば俺はその子供が感情的になって放った火の玉を、異能で跳ね返していた。

幸い跳ね返された火の玉は放った本人の顔スレスレを通り、結果的に壁に当たって消えた。

俺は完全に自己防衛で、後になって大人達に叱られているのも自業自得だった。

けれど…俺が異能で反射的に火の玉を跳ね返せていなかったら、どうなっていたんだろう。

そう考えてしまう思考に、子供ながら背筋が冷え切ったようだった。

「すっごーい!!火をブワーってぐわーってやったんだ!!!」

「いのーってスゲー!!!」

俺の周囲の子供は俺の異能に対して、憧れのような眼差しで俺を見ていた。

けど、俺からしたらわざとやったことではないし、いつの間にか跳ね返していただけだった。

だから少し、その憧れの眼差しが俺を見ていないように感じて、怖

かった。

そんな面倒臭い日々が、子供の俺に付き纏い続けた。これでもかというくらいに入り込んで来て、もういいだろってところまで追いかけて、俺や親を責め立てた。

「……………」の異能って羨ましいよなー、オレもあんな力あつたらなー」

最初はまだ小さな、憧れだった。

「アイツってぜってー調子乗ってる」

それは時間と共に爪を研いだ。

「…………お前が、…お前さえ…：…お前さえ居なければ!!あたしは生まれてからずっと…比べられることなんてっ!!!無かったのよ!!!」

ついにそれは俺や親に爪を立てた。

同じ地域に住んでる訳でもなく、年齢も俺より下であろう初対面の女が、人通りの多い場所で俺目掛けて異能で攻撃をした。両親が俺の後ろで立ち止まっていた。

早く逃げるように言っているのに、全く聞いてくれない。

二人とも俺より弱いんだから、さっさと置いてけばいいって言うてるのに、全然逃げない。

女はバチバチと音を立てながら、これから暗くなってくる街中の街灯から電気を奪った。電撃エレクトロマスタ使用なのだろうが、その異能の暴走は周囲の人々のことを考えていないであろう威力の電気を纏って俺に放たれた。それも厄介なことベクトルに向きがバラバラな無差別攻撃だった。

こんな人が多い場所で範囲攻撃するとか、周囲のこと考えてない女だな。そんなことを思いながら、放たれた電撃の向きを逆算する。電気は物質といえど、元は光と同然だから早めに逆算を終わらせてしまおうと、思っていた時だった。

「は、？」

「っ何ボーツとしてるんだ!!逃げるぞ」————!!」

電撃の向きを逆算している時に、横から素早く腕を掴まれ引っ張られる。でも俺の異能によって無意識に有害なものは跳ね返してる筈で、…じゃあ今俺の腕を引っ張ってるのは誰だ？

「あなた!あっちなら避雷針があるから電撃を受けない筈よ!!」  
「ああ分かってる!!」

…:両親が、俺の腕を引っ張って、避雷針のある場所へ…移動させてくれようとしているのか。

俺の心は両親の行っていることに酷く影響されているのに、頭は電撃の行き先を叩き出す。

息を呑んで、つんのめって躓くことを気にせず背後を振り向いた。

女はとつくに本来の限界を超えて鼻血が出ているのに、電撃は無慈悲にも俺を追って来ていた。

は、何でだよ追尾機能とかあり得ねえだろ向き変えて跳ね返すか?ダメだそうすると二人当たるかもしれないどうする?覚悟決めて電撃に当たる?異能頼ってきた俺の身体で生きる確率ないに決まってる二人俺逃そうとした攻撃を庇わないか分からねえ本当に俺がどうか出来るのか?自分だけの現実壊れたら終わりだ他の可能性は?避雷針に電撃並列思考土壇場で成功するか?でも可能性あるなら逆算間に合わねえ二人は助けてくれたのに諦めたくねえ無理だ嫌だ諦め



てたまるかでもまたこうなったらそれどころじゃねえ!!俺がいるからこうなった?今はどうにかすることだけ考えやがれ俺!!!

「お前のせいで!!お前が居たからあたしは認められなかった!!居なくなればよかったのに!!あたしが生まれてすぐにでもさあ!!!死ね!!!死んでしまえ家族共々!!!あたしの可能性を奪つてのうのうと生きないですよ!!あたしはこんなになつたのはお前が居て!!あの小娘が無事に生まれて来たからなのよ!!!あの超電磁砲レールガンはあたしのかもしれなかつたのに!!!お前と小娘が居たからこんな目にあ」

頭ん中の脳みそが崩れて水みたいに揺れているんじゃないかってくらい凄まじく頭が痛いのに、電撃の向きベクトルの逆算予測演算で並列思考することになったからか意識が飛んでいきそうだ。頭は重てえし、眠てえし、膝擦りむいて痛てえ。でもこれで、二人は

「…え」

声が自然と掠れて、目の前が少しずつ滲む。頭痛が夢ではないことを証明している。

やめろ。嫌だ。嘘だ。

「お…が、その異能一方通行…を、…」

バツと、途轍もなく小さな声に勢いよく振り向いた。

「持つ…る、…が…わるい」

俺が、…俺が並列思考マルチタスクに失敗して、向きベクトルを変え切れなかった電撃に当たって、全身に広がるまだら模様の火傷と心もとなく残った衣服に包まれながら、微動だにしない二人。

瞳孔が開き、虚うつろになった二人の瞼を閉じさせて、背を向ける。

「は……ひゅー……ぎ、ま……み……お……」

みつともなくダラダラダラダラと鼻血を垂れ流して生きてやがる女の目と鼻の先で、頭を踏み付けると思わせるように片足を上げた。

「…なア、」

両親は今まで俺と出会った人々の中で、唯一俺と俺の異能を分けて考えてくれた。

内心で返事を返す誰かがいたらと、思う思考を静かな怒りが塗り潰す。

「腹痛めて…俺を産ンでさア」

俺の異能がどれだけ強力でも、ちゃんと俺自身のこと考えて、…叱ってくれたりした。

電撃が来た時も、俺の手を引っ張って一緒に逃げようとしてくれた。

「頭捻って名前付けて、…ここまで育ててくれたところ」

俺自身の名前は、女々しいとは思ってるが、今更違う名前にされるのは納得いかないくらいには気に入ってる。もう、あの名前で誰かが俺を呼ぶのは……これで最後でいい。

死にかけ女の頭のすぐ横目掛けて足を振り下ろす。  
女が俺を馬鹿にしたような雰囲気に変わる寸前。  
バキッと、人体から鳴つちやいけねえ音と共に、女の頭が挽げる。

「…恵リイが、」

頭が女の胴体から離れ、どっかにぶっ飛んでいく。  
それと同時に首の筋組織や背骨、頸動脈といった中身から噴水のよ  
うな勢いで血が飛ぶ。  
死んだ女を踏ん付けた辺りで、ぶっ飛んでった頭が落つこちてく  
る。

「こっから先は」一方通行だ」

落つこちて来た頭から出た血が頬に飛び散る。

既に真っ暗になった街中に血の臭いが広がる。  
人を殺した俺は、もう表で生きていけない。

あの名前は人を殺した俺に合わないし、汚したくない。  
だから俺は、俺の異能<sup>一方通行</sup>として生きる。

周囲の人間の言っていた通りに生きてやる。

「まんま」一方通行」じゃア語呂悪いイからなア……」一方通行」つて書いてエ……」

これから先はもう、生まれ付きの頭脳<sup>異能</sup>で生きてやる。

「そオだ、一方通行<sup>アクセラレータ</sup>なんてイイなア…我ながらしつくりくる」

もう、イイ子で生きる理由はない。

## 一方通行な悪意と悪夢の始まり

まだ今よりも幼かった頃、親の送り迎えによって研究所に行ったことがあった。

研究所の入り口、自動ドアの向こう側に足を踏み入れた途端に違う世界に置いてかれたような感じがして嫌いだった。

右を見れば研究者が一人はいて、左を見れば研究者が一人はいて、前を見て研究者が一人はいて、後ろを向いて早く帰りたいかった。それくらい嫌いだった。

アクセラレータ  
一方通行として降り立った今も嫌いだ。

ただ、子供の頃と違い全身に感じる目線や意識はほとんどが“恐れ”に変わっていた。

子供の頃は酷かった。反射的に“俺はり○ちゃん人形みてえな売りもんじゃねえ!!”と叫んでしまいそうなくらいに気色の悪い視線ばかりだった。

アクセラレータ  
「所長！あ、一方通行は我々の手に余りますよ!!」

「そ、そうじゃがなあ…」

とにかく妙にメガネかけてる奴が多い研究所が、俺がアクセラレータ一方通行として入った研究所の一つ目だった。両親が死んだからって学園都市に引き取られて、研究価値が高いから成人するまでは研究所につて…それつまり俺のプライベートも全部把握されるってことじゃねえか。

俺がいる部屋にまあまあ近い部屋で手に負えないだとか一方的に言われる中、俺は留まっていた部屋を出て研究所を見て回った。つっても俺が見て回れた場所の全部がきな臭い研究ばかりで、中には将来的にレベル5になると言われている少女のクローン計画的なものもあった。

アクセラレータ  
「いくら一方通行の研究価値が高くても、我々研究者が殺されてしまえば元も子もないですよ!!」

「そオかよ。じゃア俺は別ンところにでも行かせてもらうンで、気色悪いイ幼児趣味みてエな研究ともお別れを言えるつてもンだなア」

そんな流れで何度も何度も色々な研究所を移動しまくって、引き渡し手続きをどれだけしたことか。そのせいで引き渡し手続きの手順を覚えちまったし、どいつもこいつも人の顔見て悲鳴上げるか顔青ざめて逃げやがる。まあ、それを面白半分で追っ掛けて圧かける俺も悪りいか。

ただ俺だつて逃げられて傷付かねえ訳じゃねえし、確かに面白半分で追っかけて圧かけるがその度に変に傷付いて、他者を信用できない経験が増えていく。

いねえつて分かつてんのに、俺のひび割れた心は未だに両親に近い存在を探していやがるんだ。

「よお、学園都市第一位アクセラレータ一方通行」

「学園都市第一位は余計だア学園都市第二位のメルヘン野郎」

学園都市で俺に突っかかってくる奴らは大抵学園都市が規定する格付けに対して不満がある奴らが多い。ああでも、第三位の女はどうかで見たことがあつたような…。

まあいい、とりあえずそんな中でも一番突っかかって来んのは垣根提督かきねていとく…もとい未元物質ダークマターを使う時に羽根が生えやがるからメルヘン野郎だ。

「はあ？俺がメルヘンならアクセラレータ一方通行、お前はもやしだ」

「一々羽根六つ生やして飛ンでると思えば、その羽根をナイフみてエにブツ刺すメルヘンよりかマシだ」

こんな言い合いを出会い頭でかまされる俺の身にもなつて欲しいもんだ。それに何だかんだで学園都市の能力者第一位に立ったとはいえ、あくまでもつい最近の話だからか通りすがりに喧嘩ふっかけられることもあつたなあ。まあ、喧嘩ふっかけてきた割には弱すぎて話になんなかったが。

そんな無駄話をしてしていると、ポケットに入れていた携帯にメールが届いたことを振動で察知する。学園都市第二位とこんな言い合いをするような仲つていうことが関係している訳じゃないが、大抵の奴らに好意的に見られない俺の携帯にある連絡先は基本研究所からだ。

「…人のことをホイホイ呼び出しやがって…じゃアなアメルヘン野郎、俺は研究所行きの予定が出来た」

その日から、俺の夢見がどんどん悪くなっていく原因になる実験に参加させられるなど、あの時の俺は知らなかった。

## 一方通行な感情と出会い

絶対能力進化計画、それは現在レベル5である俺が”最強を超えた無敵の存在”と称されるレベル6に上がる為の計画だ。計画の内容は至って簡単、同じレベル5である学園都市第三位のクローン体を約2万倍俺が倒すことによって、計算上はレベル6になるという計画。

最初はクローン体の元である第三位の異能が、学園都市内の電撃使い系の頂点に立つ異能だと聞いて嫌な記憶を思い出した。第三位エレクトロマスターに関係などない私情だったが、それでも電撃使いと聞くと自身エレクトロマスターの異能の限界を超えて鼻血を垂らしていたクソ女を思い出してイライラした。

俺も説明を受けて眉唾だと思ったが、研究者達としてはレベル6という理論上の概念の存在への好奇心が大きいらしい。俺も一応最強という称号を持つてはいるが、最強は無敵ではない。

なら目指さない理由もねえし、八つ当たりでもしたいくらいには電撃使い系統の奴らが気に入らなかつた。

「…ああこそ、…ンで今更クローン殺す夢…」

クソ、第三位のクローン体を殺した総数が5000を越そうとしてきた辺りから、第三位のクローン体を殺す夢ばかり見るようになってしまった…。躊躇もしてねえ。ただ、所詮はボタン一つで造られるものだからすぐにぶっ壊れるがな。

だけど何度も殺す度に抵抗のての字もないクローン体との戦闘は、多分どつかで壊すことに罪悪感があつたクローン体が俺そに殺される為いに造られた存在ののだと俺の感覚を麻痺させていった。

ほとんど人型のサンドバックのように思えて、たまに変に抵抗するやつがいたら足を腕いだりしていたぶつた。別にそういう趣味でもないし、当然研究者だつてそんな趣味があるからこんなことをしている訳ではない。



しかし人型、されど人型であるせい、夢に出ては違いすら分らないクローン体達を殺す。

俺自身が精神的ダメージを自覚していないだけかもしれないが、少なくとも俺の身体は人型の少女を殺していたぶることをよしとしていなかった。ボタン一つ押して、二週間くらいで出来る造りものに対してだ。今まで散々色んなものを殺してきたのに、今更すぎて笑っちまいそうだ。

横になっていたベッドから起き上がって、半ば寝ぼけ眼で住んでいるマンションの部屋を歩き、鍵と財布を持って玄関を出て鍵を掛けた。目的地は近くの自動販売機に売られている暖かい缶コーヒー。元々コーヒーは好きだったが、特に最近のカフェイン目的で買い込んでいる。

まあコーヒーを飲むようになったキツカケは、寝ている状態の俺を殺しにくるやつがいたからなんだがな。どうせ反射すんのは分かっているが、どこの誰がそんなご丁寧なことしやがったのかぐらい聞かねえと俺の気が済まなかった。

「……はア、売り切れじゃねエか」

目的地に着いたは良いものの、肝心の自動販売機に置かれていた缶コーヒーは売り切れていて寝起きということもあり、若干機嫌が悪くなる。真夜中の真つ暗な路地にある自動販売機の光によって、自動販売機の内部に並べられた飲み物と外気を遮るプラスチックに薄ら俺が映っていた。

少し人通りが多いことを我慢すれば、この先にはコンビニがあるが……寝起きでいつもの自動販売機に缶コーヒーがなくて不機嫌な俺がコンビニに行つて、変なのに絡まれたらぶつ飛ばさない自信がない。そう判断して仕方なく来た道に戻って寝る為に振り返った時だった。

「……兎……？」

昼間であつても人通りが少ない路地である筈の道には、かなり規模の小さい公園と繋がる道があるのだが、その公園へ入っていく：兎をモチーフとした黒いフードを被った途轍もなく怪しいコスプレをしてやがる奴を見た。

一応俺はこの辺りに住んでそう長くないことから、恐らく初対面なんだろうが如何せん目立つ見た目してやがる奴だ。そんなことを思いながらその日はそのまま家に帰った。

翌日の深夜なりかけの同じ路地でまたコスプレした奴を見た。しかも体格や立ち姿から同一人物。

そんな目立つ格好をしている割には一人寂しくブランコに座っているもんだから、本来子供などが使う公園との雰囲気は別次元すぎて気持ち悪い。

その翌日もソイツは暗くなった公園に現れては、特に何かすることもなく一人ポツンと寂しそうにしているだけだった。その翌日も、そのまた翌日も現れては公園にいる。

：何も思わねえ訳じゃねえが、関わったところで何になる。  
どうせまた逃げられるなり怯えられるなりに決まってる。

けれどもいつもソイツが公園にいるせいか、公園にソイツがいるかどうかを確認すればするほど俺の目的はコーヒーから離れていった。気付けばコーヒーを買うついでではなく、公園にソイツがいるかどうかの確認のついでにコーヒーを買って帰る始末だ。

変な異能にでも掛けられて、どっかから俺の遺伝子情報でも盗もうとでもしているのかと思つたし、何だつたら一度ソイツの近くで堂々と姿を見せたこともあつた。

：腹が立つことに、ソイツは確かに一瞬は俺を視界に入れたが、ほんの少し目線がズレたと思えば俺の背後…といつてもこの薄暗い路地に入るまでの広い道路の方を歩いている親子を見ていた。

さしてソイツのことを知らねえ俺でさえも分かるくらい、ソイツは遠い目線の先で手を繋ぐ親子に憧れるかのように目を揺らしていた。

それ以来、実験の呼び出しが増えたこともあってソイツがいた公園に行けなく、いや、行きたくなくなった。馬鹿みてえに幸せだった時の俺を思い出して、そんでその幸せを守れなかった俺に心底腹が立つから。：そして俺とソイツを重ねてしまうから。

俺にもああやって普通の生活や穏やかな時間に憧れた時があった、だがそれも年齢を重ねる内に諦めた。だからほとんどの奴らが普通に生きれない学園都市で、あんなにも普通に憧れる奴を俺は初めて見た。だからこそ諦めた俺が馬鹿みたいで、情けなくてイラついた。

これ以上は自分だけの現実越しバーンナルリアリテイに影響が出る。そう思っただけで思考を他のことで溢れさせた。

## 一方通行な可能性と理解

全てが一変したのは八月の上旬、朝昼晩関係なくクソ暑い炎天下だった。

真夜中であるにも関わらずに蒸されるように暑い外気に若干イラツとして、比較的涼しい例の路地に足を踏み入れた時だ。

「……なんだコイツ…、干からびてンのか？」

俺の目の前には思わずそう口に出してしまうほど、グツタリとアスファルトに倒れ込むソイツの姿。まさか、熱が地面よりも逃せないアスファルト照りで地獄な夏も、黒い服を着て行動しているとは思っていなかった。

予想外の現実に驚きながら近くにあった枝でソイツをつつく、軽いうめき声を出すことから生きてはいるんだろう。流石に道端に人間を放っておくのも邪魔だと思つて、抱えて公園に備え付けてあるベンチに寝かせた。そう、これなら良いだろうと思つて背を向けた途端だった。

「早く……<sup>殺</sup>楽にして……」

寝言かどうかも判断が付けられないソイツのうわごと公園から出ようとしていた足が止まる。

「…そう、したら……あの……ひと……、に」

振り向くと、ソイツはベンチに仰向けになつたまま顔を歪め、泣いていた。会いたい会いたいという呟きの割には死にたいだの殺してだの言つて、何度も手首辺りを引っ掻く。あまりにもその動作が手慣れていたものだったから、気になってソイツの着ている上着を剥いだ。

上着の下は妙なベルトがソイツを見ただけで体型が分かってしま  
う程にあつて、体型的に女だということに気付いて内心目のやり場に  
困った。

ベルトが多くあるところをなるべく視界に入れないようにしながら、  
手慣れたように引つ搔いていた手首辺りを見て、無言でソイツを  
担いで住んでいるマンションに帰る。

家に帰ってソファアにソイツを転がし、未だ使ったことのない救急  
箱を何とか引つ張り出して、引つ搔いていた箇所には下手くそな応急処  
置をした。

見ていられない程に腫れた皮膚は、ついさつきまで引つ搔かれてい  
たせいか血が滲み始めていた。

俺自身も理由が分からないくらいに焦る手元は、せつかく巻いた包  
帯を間違えて解いてしまう。なんでこんなことしてるかなんて、全部  
分かってたらとつくのとうにやめている。ただ無性に、俺に似ていた  
目をしていたソイツに訳も分からない何かを抱いている。

：いや、何となくは分かっている。俺がああ二人を失った直後は自  
暴自棄になつていたし、だからこそ落ちるところまで落ちたんだ。

いつその事：最初からそうであつたように振る舞えばいいと、思つ  
たから：今の俺がいる。

何でもいい、誰でもいい。どんな理由でも構わないから、俺を叩き  
落として欲しかった。

それこそ、物語の悪党ヒールの定番テンプレのようになりたかつた。

：助けられなかつた、守れなかつたことを誰かに酷く責め立てて欲  
しかった。

多分、ソファアに転がるコイツに気をかけてしまうのは、俺が迎る  
かもしれない可能性のようだからだ。如何せん自分だけの現実パーソナルリアリティ  
が強いことは異能を持つ奴らの異能の強さに比例するから、俺はコイ  
ツのようにならなかつた。でも、もしも：そんなことがあつたんな

ら。

「けつ、悪党にあるまじき考えでしかねエなア…」

これ以上は自分だけの現実パーソナルリアリティに影響が来るだけじゃ済まされねえ…。

この呑気に人ん家のソファアーに転がされたコイツに、夏に黒い服着てぶっ倒れるドジをしたコイツ自身に、俺が能力異能を使ったらすぐ吹っ飛んじまいそんな目の前の存在に、気を取られてしまっただろう。…俺が二人を巻き込んでしまうことに慌てたようにだ。

目の前のソファアーに横たわるヤツを、もう一度抱え上げて外に出る。

夕方になりかけている空は既に暗く、外出している人の流れもそろそろ収まったところだろう。

そう思っヘンキャンセラーて民家の屋根を渡り歩き、とある病院を目指す。

そこには冥土ヘンキャンセラー帰しの二つ名を持つ、カエルみてえな顔の医者がいる。

人がいないことを見計らって、病院のベランダに抱えたソイツを転がす。

「二度と、俺に会いに来ンじゃねエ」

そんな時は…と、言いかけた口を閉じる。…何を言おうとした？そんな時も何もレベル6に上がればあんなヤツなど必要ないし、そもそも会う機会などない。何慌ててるんだ、俺は。

民家の屋根を渡り歩いて、いつものマンションの一室に帰ってきて俺の調子はしばらく戻らなかった。俺が何をアイツに求めたのかも分からないまま、月日は無情に過ぎていった。

## 後先考えずに方向転換

七月の下旬、13577号分は欠陥電気能力的にはオリジナルの1%にも満たない程度、実力は2万人集まってもオリジナルに敵わない程度を使用した戦闘訓練を布東砥信に申請し、訓練を行っていました。布東砥信は相変わらず13577号分の行動原理が理解出来ていないようで、戦闘訓練の申請時に何度も不思議そうな顔をしていました。

一面真っ白な広い空間にバチバチと、13577号分が欠陥電気を使用した時特有の音が鳴り響きます。今回試したかったことは、13577号分が欠陥電気を使用できる限度域の計測です。

「これから戦闘訓練を開始しますと、自分ミサカは布東砥信に宣言します」

そう言って以前発見したようにクラウチングスタートの体勢をとり、欠陥電気レディオノイズを両足のみに集中させた状態で、一面真っ白な空間の一番端の壁を目指して床を蹴れば、すぐに目指した壁スレスレに到達します。痺れるような感覚が両足に襲いますが、訓練を繰り返さない程ではないですね。

最初は一度や二度で音を上げていた一時的な移動速度の加速運動も、今は慣れて最低でも十回は繰り返せるようになりました。それを義務教育上で行われるというシャトルランのように何度か繰り返す中、二十五回を過ぎた辺りで両足を動かす度に激痛が走るようになりました。

まるで神経が直接焼かれているような激痛に耐えながら、前に踏み出した瞬間でした。痛みもなくグラリと、身体が重たい頭を支えられないまま床に座り込んだと思えば、そう経たない内に座っていることすら辛くなつて床に横たわっていました。

布東砥信が空間外から呼びかけている声が聞こえる中、未だ続く両

足の激痛と立つ事すら出来なくなった身体に染み込むような眠気が、  
13577号自分に襲いかかってきました。

過去最大に重たく感じる瞼に抵抗するも、抵抗虚しく13577号自分  
は一時的機能停止しました。

「You know what 何も怪我してまで戦闘訓練する理由  
は、13577号貴女にないでしょう？」

「…はい、怪我をしない為の訓練で怪我をしては意味がなかったと、  
自分は反省します」

意識が浮上してすぐに布東砥信に怒られました。

ズキズキと痛む両足以外に、胸のどこかもズキズキと痛みます。  
訓練の影響で体調でも崩したんでしょうか。

「That's not it …私が言っているのはね、  
13577号貴女は訓練したところで一方通行アクセラレータに勝てる存在じゃないの」  
「…」

布東砥信の言葉に何も言えずに俯きました。事実、13577号自分は  
一方通行アクセラレータに万が一でも勝てるとは思えません。知識や経験で勝った  
ところで、純粋な力量で負けているのです。

そんなことは、一度目の一方通行アクセラレータに削除殺される妹達シスターズを見た時から  
理解してはいました。

ですが…、です、が…。

「つまり無駄なの、understand? That's why  
今日訓練したこともどうせ無駄な努力だし、13577号貴女が実験体



として一方通行の前アクセラレータに立った時に使える、使えないじゃないわ」

13577号自の考えが、布束砥信に理解されることはないと分かっています。

しかし、…こんなにも…。

「13577号貴は一方通行アクセラレータをレベル6にする為の消耗品、削除殺される以外の選択肢なんてある、訳が…。」

…まるで内臓が掌握されたかのように、呼吸がしにくいのは何故でしょうか。

そんなことを考えた途端に視界が歪んで、目の近くに水滴が現れては重力に従って落下していききました。慌てて顔を上げて、落下していき見覚えのない水滴を手のひらに受け止めます。

学習装置テストメントから学んでいない新たな事柄に困惑し、近くにいる布束砥信へ指示を仰ぐように見上げると、布束砥信自身も信じられないとばかりに13577号自を見していました。

「あ、13577号貴…なんで…、泣いて…？」

「…学習装置テストメントから泣く」という単語が存在していることが入力されています。つまり、13577号自は泣いているのですねと、自分ミサカは新たな知識を学習したことを布束砥信に伝えます」

この出来事が布束砥信の未来を左右してしまったことを、13577号自は知りませんでした。

## 方向転換する先の障害物

八月上旬、夏真っ只中の外気は、湿気と熱気で蒸されているかのよう  
に暑いです。

布束砥信が七月から八月に変わる辺りで居なくなってしまったこと  
とで、計画していた段階を早め、13577号<sup>自分</sup>は現在の担当者の外出  
許可を得た上で、学園都市内で一番一方通行と遭遇する率が高いと言  
われている路地に、何度も訪れていたある日のことでした。

「…自分<sup>ミサカ</sup>は蒸されている食材になったような気分ですと、自分<sup>ミサカ</sup>は誰も  
聞くことのない独り言を呟きます」

仮に13577号<sup>自分</sup>が食材になると仮定するならば、それを食べる捕  
食者の立ち位置に入るのは一方通行<sup>アクセラレータ</sup>になるのでしょうか。そんな暇  
潰しのようなことをずっと考えていたからでしょう。

待ち伏せしている路地にある、小規模の公園を目指して歩いていた  
筈の足に力が入らなくなり、咄嗟に四つん這いになって倒れないよう  
にしても、時間差でアスファルトの地面に倒れ込みました。

「あ、補助具を…付けた、ままで…し…」

外気の熱とアスファルトから間接的に感じる熱に<sup>ブラックアウト</sup>一時的機能停止  
する寸前、戦闘訓練で使っていた補助具を付けたまま移動していたこ  
とに、今更気付いたんです。

欠陥電気能力的にはオリジナルの1%にも満たない程度、実力は2万  
人集まってもオリジナルに敵わない程度による一時的な移動速度の  
加速が一定回数こなせるようになってから、その急激な移動速度の変

化によって、両足や胴体周りの筋肉に大きな負担がかかっていることが分かりました。

「13577号が持つ欠陥電気レディオノイズの性質は、他の妹達シスターズとは一線を画かくす他との違いをはつきり示す例えわ。Howeverけれども、代わりに13577号貴女の身体への負担は正直計り知れないと言ってもいいくらいに大きい」

「…やはり、使用を禁止されるでしょうかと、自分ミサカは恐る恐る布束砥信に聞き返します」

「そんな目をしないでちょうだい、私まで悲しくなるわ」

13577号自分が今も使用している補助具は、以前布束砥信が13577号自分と会えなくなる前にくれた物です。革製のベルトが胴体と両足の可動域を補助し、ベルト同士を繋げている金具でベルトが劣化することを遅らせているそうでした。

当時、その補助具をくれた際の布束砥信は初めて13577号自分の頭を撫でてくれました。

胸の奥が温まるかのような感覚があったことをよく覚えています。

「Thereforeそこで 作こってみたのがこの補助具よ。付けている間は簡易的な衣服の保護も兼ねているから、人前じゃなければ日常的に付けても大丈夫だと思うわ」

「これを、自分ミサカに、ですかと、自分ミサカは布束砥信からの贈り物を受け取ります」

「……そうよ。13577号貴女のおかげで、私は新しい可能性を見出せた…そのお礼ね」

布束砥信はその日、13577号自分が突然変異生物やウイルスがもつ遺伝物質の質的・量的変化をした個体でよかったと言ってくれました。

「ああ、意識が戻ったみたいだね」

気付くと、13577号<sup>自</sup>は病院のベッドに横たわっていました。13577号<sup>自</sup>の担当医であるという、両生類のような顔をした医者が淡々と状況を話している声が個人用の病室に響いていました。

「まあ、ありがちな熱射病で昏倒していたんだろうけど、君を病院まで連れて来てくれた人には感謝しておくんだよ。あと少しでも遅れていたら何らかの障害が出ていたからね」

「それと病院で一泊はしていくように、まだ調子が戻った訳じゃないからね」

「分かりましたと、自分<sup>ミサカ</sup>は目の前の医者<sup>ミサカ</sup>の意見を受け入れます」

「…それと君は彼が今、一方通行<sup>アクセラレータ</sup>に施している実験<sup>ミサカ</sup>の変異<sup>子</sup>個体<sup>ミサカ</sup>なんだね。彼から薄らと聞いてはいたけれど、身体情報の八割<sup>ミサカ</sup>が変異したというだけあるね。元になった情報の半分以上<sup>ミサカ</sup>が使えなかったよ」

「どういうことでしょうかと、自分<sup>ミサカ</sup>は目の前の医者<sup>ミサカ</sup>の言っていることに首を傾げます」

「とりあえず、君が意図<sup>プラン</sup>して彼の計画<sup>プラン</sup>の邪魔<sup>プラン</sup>をしていなければ、言っていることが分かっている<sup>プラン</sup>なくてもいいんだよ」

その医者<sup>プラン</sup>が言っていた人に、13577号<sup>自</sup>は心当たり<sup>プラン</sup>がありません。一番<sup>アクセラレータ</sup>一方通行<sup>プラン</sup>と遭遇<sup>プラン</sup>する率<sup>プラン</sup>が高い<sup>プラン</sup>と言われている路地<sup>プラン</sup>で倒れていたんだ<sup>プラン</sup>と思いますが、一体誰<sup>プラン</sup>が13577号<sup>自</sup>を病院<sup>プラン</sup>に連れて来た<sup>プラン</sup>んだろうと再度<sup>プラン</sup>首を傾げます。

それに“彼”とは一体誰のことを言っているのでしょうか。

“彼”と呼ばれていることから男性であることは確定しています  
が、“彼”と呼ばれている人物が一方通行の絶対能力進化計画を行  
なっている？そして13577号の存在が“彼”の計画の邪魔にな  
りうると危惧している、といったところなんではないでしょうか？

しかし、一方通行の絶対能力進化計画の邪魔になつてしまうような  
行動を、13577号がとつた記憶が…ある一点以外ありません。つ  
まり一方通行の絶対能力進化計画とはまた別の計画が存在し、その  
計画の邪魔になる可能性が13577号にある、ということではし  
ょう。

…もしや、妹達に何故か埋め込まれた軍事知識は、その為…？

軍事知識というものはそのまま軍事に関する知識のこと、つまり“  
彼”が将来的に行おうとしている計画は戦争を想定しているという  
ことでしょうか？一体どうして、何の為にでしょうか？

少なくとも妹達に軍事知識があるということから、何らかの理由  
で一方通行の絶対能力進化計画が終結するんでしょう。そして、学園  
都市という小さな国の外と学園都市が対立することが見込まれてい  
る…という考えでいいんですよね…？

一方通行の絶対能力進化計画が成功で終わるのか、失敗で終わるのか  
は予測出来ませんが、現在製造されている妹達全てが削除される訳  
ではないんですね…。そもそも一方通行がレベル6に至るのがオリ  
ジナルを約2万体制害すること、と判明した理由や経緯も不明です。

そう考えると、“彼”という存在はこの学園都市内でかなりの権力  
を有している…というのは確定でしょう。そして、何らかの方法で  
13577号の存在を知っている…ここまで来ると深く考えたくは  
ないですね。

どちらにせよ、“彼”が一方通行以上の実力を持っていない確証は  
ありません。

…想定外のことは起きましたが、13577号は13577号にで  
きることをするだけです。

## 方向転換しながら深く感情を知る

13577号<sup>自分</sup>は今、重大な問題に直面していました。

「いや、まだ病院から退院するのは早いよ」

「何故ですかと、自分<sup>ミサカ</sup>は懇願します」

「彼<sup>ミサカ</sup>に君がどれだけ自身<sup>ミサカ</sup>の身体に無理を強いているか伝えたら、せつかくだからしばらく病院で預かって欲しいって言われてね」

ああ、“彼<sup>ミサカ</sup>”という存在が誰だか分かりませんが、13577号<sup>自分</sup>は少しでも早く一方通行<sup>アクセラレータ</sup>と接点を作りたいんです…。

八月上旬、何もすることがないまま食べて寝てを繰り返すことも、流石に飽きてきてしまいました。ただ、印象的なことがなかった訳ではありませんでした。正確な日時は覚えていませんが、ある日の昼間に飛行船が病院の近くを通りました。…ああ、確か八月九日でした。

学習装置<sup>テストメント</sup>から入力された軍事知識から、戦闘機等の飛行する乗り物があることは知っていました。しかし、いざ13577号<sup>自分</sup>の目で見た時は、言語では伝わり切らないような“感情”を感知しました。

果てしなく澄み切った青空の中、白く冷たい雲に紛れて快晴の空を飛行する小さな船…決して移動速度が早い訳ではなかったですが、優雅に空を旋回して病院から離れていく様は空を泳ぐ鯨のようでした。

「…どうしたんだい、お腹空いてないのかな？」

「あ…違いますと、ミサカ<sup>自分</sup>は隣の女性に言葉を返します」

カチカチと、光に従って時を刻む時計の秒針の音が、病棟の廊下に響きます。13577号の隣には、いつの間にか座っていた長い茶髪の女性が一人座っているだけで、他の人は既に昼食を終えて去ったようです。

「ただ…、昨日初めて飛行船と呼ばれている物を目にして、それが頭から離れないのですと、ミサカは言葉を続けて発します」

「ああ、アレか」

隣に座る女性は、昨日の昼に現れた飛行船のことを“アレ”と呼び、酷く嬉しそうに笑みを顔に浮かべました。その女性の目元には薄らとした隈が残っていて、今まで睡眠が取りづらい状況だったことが窺えました。

「アレはね、私の…教え子達が、私の誕生日に飛行船を使って祝ってくれたんだ」

「教え子という事は、貴女は以前教師として働かれていたのですかと、ミサカは茶髪の女性に問います」

「随分昔にね。まあ…それもしばらくしたら辞めてしまったよ」

学習装置から入力された単語の一つである“哀愁”を帯びた顔で、女性はやつと落ち着けたかのように言葉を途切れさせました。…いえ、それとも“憤怒”でしょうか。その女性の表情は学んだばかりの感情から、たつた一つだけを断定することを不可能と判断させる顔をしていました。

…カチカチと、秒針の音が聞こえる程の静寂が会話を途切れさせます。この茶髪の女性の感情は、13577号が学習装置で入力された情報よりも複雑奇怪で、非常に興味深く感じていました。

「…ミサカ、は」

「…？」

「ミサカには、…」

「そんな目をしないでちょうだい、私まで悲しくなるわ」

「ミサカには、悲しい目をしないで欲しいと言って…ミサカの頭を撫でてくれた人がいました」

「……そうよ。13577号のおかげで、私は新しい可能性を見出せた…そのお礼ね」

「初めてミサカがいることを、良かったと言ってくれた人が…いましたと、ミサカは昔を思い出します」

「…そっか」

「ミサカは一言で例えるなら、世間知らずです。その人は、そんなミサカに感情を教えてくださいましたと、ミサカは女性に話します」

…カチカチと、秒針の音が続かなかった会話と、沈黙を重たく感じ



させました。

今日の病院食の献立にされた汁物の表面に、13577号自の無機質な顔が映りました。

……御坂美琴オリジナルのことを酷く……羨ましいと、初めて思いました。

「君はさ、好きな物とかってあるかい？」

「好きな物……ですか」

「そう……日々を過ごしてる中で、何だか、そこにあることが嬉しく感じる物はある？」

一番最初に頭に浮かび上がったのは、布束砥信の最後に見た姿でした。

「食べ物でも、場所でも……それこそ人でもいい」

二番目に浮かび上がったのは、この病院に来るキツカケになった公園でした。

「まあ、人に対しては……君ぐらいの年齢だからね……もしかしたら、他の人に対する“好き”とは違う“好き”を感じる人がいたりするかもしれない」

三番目に浮かび上がったのは、……………。

「とりあえず何でもいいんだ。好きなもの、人はそれと関わった時……色濃く感情が現れる」

「……色濃く、ですか」

「だから君が感情を知ったばかりだったとしても、君は私より感情を知っているだろうし、私も君より知っている感情がある」

そう言って“笑う”女性の姿は、13577号自の頭に焼き付くよう

に残りました。

## 方向転換したら高校生と会う

八月十一日、学生であれば夏休みと呼ばれる長期休暇の時期に入る  
んでしよう。そんな学習装置テストメントから入力された知識を頼りに、個人用の  
病室の窓から外を眺めます。無意識で布束砥信から貰ったベルトと、  
初めての外出で買った季節外れでありながらうさ耳付きの上着を  
ギユツと抱きしめます。

そんな時でした。

「青ピ、そこはカミヤんの病室じゃないにやー」

「え？」

ガラガラと部屋の扉が開く音の後、聞き覚えのない人の声に驚いて  
部屋の入り口へ視線を向けます。そこには見覚えのない男性が二人、  
一人は扉に手をかけて開けたと思われる青く染めた髪とピアスをし  
た人、もう一人は入り口の扉の少し奥に立っている金髪でサングラス  
をした人でした。

恐らく身長が180はあるであろう二人に、内心怯えながら  
13577号自分は彼らに話しかけました。

「…あの、何か御用でしょうかと、ミサカ自分は見知らぬ男性二人に問いか  
けます」

「あボク青髪でピアスしとるから、みんなから青ピって呼ばれとる。  
いやー今日はラツキーやね、こんな美少女に出会おてしまうなんて！  
な！土御門！」

「ラツキーかもしれないけどにやー、今日は入院してるカミヤんの見  
舞いで来たってことを忘れちゃいけないんだぜい」

彼ら二人が言い合っている話の内容を聞いている限り、彼らは「カ  
ミヤん」と呼ばれている同級生が入院したということで見舞いに来  
たらしいです。恐らく彼らは高校生で間違いないので、可能であるの

なら彼らと行動を共にし、年頃の男性が好む女性図というものを学びたいものです。

可能ならば彼らが自らの顔に投影する表情を見て、13577号も投影可能にしたいですね。オリジナルに近い顔であることから、ある程度整っている見目ではありますが、無表情でいるのは些かよくないでしょう。

「もし良ければ行動を共にしていいですかと、ミサカは二人に提案します」

「ほら美少女ちゃんもこうゆうとるやろが土御門!!」

青髪ピアスと共に何とか金髪サングラス：もとい土御門つちみかどもとはる元春の説得に成功し、“カミヤン”という同級生がいる病室に13577号も同行します。

勿論黒兎のフード付きダウンジャケットを着て、その下に布束砥信から貰ったベルトを付けた完全装備で移動しています。あ、ダウンジャケットのチャックは締め切っているので、見られる心配はありません。

「大体野郎どもっていうのはにゃー、女の子に対する下心が計り知れないもんなんだぜい」

「土御門は心配しすぎやとボクは思うで」

「つまり、年頃の男性の女性に対する性欲に気を付けるように言っている」と解釈していいですかと、ミサカは土御門に聞き返します」

瞬間、13577号の前方を歩く二人の片方、青髪ピアスが瞬時に13577号の言葉に反応しました。

「…び、美少女ちゃんの口から性欲っつー単語が聞こえた気がしたんやけど、聞き間違いやろか？」

「いや、聞き間違いじゃないにやー」

…どうやら13577号自のような外見で、性欲等の単語を口に出すのは宜しくなさそうですね。13577号自の前方を歩く、青髪ピアスの振り向く速さは13577号自が言った言葉ではないと信じたくなかったことの表れ、ということでしょうか？

「…その場合、ミサカ自も下心があると云っても過言ではないのですが、大丈夫ですかと、ミサカ自は二人に問います」

「まあ大丈夫やろ、美少女ちゃんの下心言っても男の下心よりかはだいぶマシや」

ガラガラと、13577号自の病室からさほど遠くない個室のスライド式の扉を青髪ピアスが開けました。

「こんちゃーカミヤん、元気してたかにやー」

「夏休みを入院で潰したなーカミヤん」

「あ！どうしてお前らがここにいるんだよ」

「小萌先生に聞いただけだぜい」

…そんな同級生と納得出来るような会話の様子を、13577号自は恐る恐ると扉の向こうで覗き見ていました。

「せや、美少女ちゃん！こっちこっちー！」

「は？美少女ちゃん？」

「あー…実はカミヤんの病室来る前に青ピが病室間違えてにやー、そ

の病室にいた子だぜい」

室内にいる三名の意識が完全に13577号分に向いたことに気が付き、兎の耳が付いた黒いダウンジャケットを被った状態で前に出ました。

「こんにちわ”カミヤん”、13577号分は…」

「あ、すまんカミヤん。”カミヤん”っつー名前やと思われとる」

「…違うのですか？」

“カミヤん”…その単語が何度も彼らの会話に出てきたことから、目の前のベッドに横たわる黒髪の青年の名前だと思っていました。つまりあだ名、通称のような呼び名だったということでしょうか？それを指摘するのであれば、“青髪ピアス”はあだ名ではないのでしょうか？

「俺は上条当麻、断じて”カミヤん”というのが名前ではないからな…？」

「失礼しました。では改めまして…こんにちわ上条当麻、13577号分は方向転換エンコードと言います」

今日、この出会いは13577号分が学園都市の中心に触れた日であり…

「木山春生きやまはるみからの課題に13577号分だけでは不可能と判断したので、上条当麻・土御門元春・青髪ピアスの三名に手伝いを依頼してきましたと、ミサカみさかは彼らに同行した理由を明かします」

13577号分が人間ひととして生きる始まりとなった日でした。

方向転換で見逃しそうな闇？

八月十三日の午後、13577号<sup>自</sup>の前には呆れる木山春生と青髪ピ  
アス・土御門元春・上条当麻の三名が頭を抱えています。：  
13577号<sup>自</sup>のせいでしょうか？

「確かに、確かに私は君に好きな物を探してみるようには言った。  
言ったが…」

「まさか青ピの“アレ”に真顔で突っ込むとはにやー」

「ボクあ落下型ヒロインのみならず、義姉義妹義母義娘双子未亡人先  
輩後輩同級生女教師幼なじみお嬢様金髪黒髪茶髪銀髪ロングヘアセ  
ミロングショートヘアボブ縦ロールストレートツイントールポニー  
テールお下げ三つ編み二つ縛りウェーブくせつ毛アホ毛セーラーブ  
レザー体操服柔道着弓道着保母さん看護婦さんメイドさん婦警さん  
巫女さんシスターさん軍人さん秘書さんロリシヨタツンデレチア  
ガールスチュウエイトレス白ゴス黒ゴスチャイナドレス病  
弱アルビノ電波系妄想癖二重人格女王様お姫様ニーソックスガ  
ーターベルト男装の麗人メガネ目隠し眼帯包帯スクール水着ワンピ  
ース水着ビキニ水着スリングショツト水着バカ水着人外幽霊獣耳娘ま  
で

あらゆる女性を迎え入れる包容力を持つてるんよ」

「…つまり、好きになってしまえば誰でも構わないということですか  
と、

「<sup>自</sup>ミサカは青髪ピアスに聞きます」

「あー…間違いではないんやけど」

「言及していたのは服装・年齢・職業・自身との関係・容姿・種族・相

手の言動等ですが、

その場合動作といったような相手側の行動の希望はありますかと、  
自分ミサカは青髪ピアスに質問します」

「聞かれてもなあ…ボクはあくまでもタイプの話をしただけやし、  
流石に好きになった相手にこーしろあーしろ言うことはせえへん  
よ。」

それは野暮ってもんや」

「なるほど、理解しました。」

青髪ピアスはあくまでも自身の好みを口にしていただけであり、

それ以上でもそれ以下でもないのですねと、

自分ミサカは青髪ピアスの返答に納得します」

「それに普通絵本の感想聞いて、まさかあんな返答がくるとは思わん  
やろ」

「…そんなにおかしかったでしょうかと、  
自分ミサカは首を傾げます」

「人魚姫の絵本はどうだったかにやー」

「一番最初に気になったのは、王子に対して人魚姫が筆談を行わな  
かったことです。」

それに王子を救助した際に隠れるのではなく、むしろ堂々と姿を見  
せていれば他の女性と結婚してしまうこともありませんでしたし、王  
子をナイフで刺さねばならない状況には至らなかった筈です。あと、  
自分13577号は恋愛を詳しく知っている訳ではありませんが、生まれ  
育った種族が違う時点で叶うわけがない恋？というのが理解出来な  
いのが理解出来ませんでしたと、



ミサカは人魚姫を読んだ感想を告げます」

「辛辣すぎないか…」

「じゃあシンデレラは」

「途中まではまだ納得できる範囲でしたが、主人公の義姉達の行動の意味が理解出来ませんでした。例えばガラスの靴が履けたとて、義姉の見目が舞踏会で現れた主人公のような見目になる訳ではないことくらい分かっています。それこそ主人公が舞踏会に行く時に出会った魔法使いの魔法に驚いていたことから、魔法という存在が一般的なものではないことが伺えます。」

恐らく、ガラスの靴が履けた<sup>イコール</sup>舞踏会でガラスの靴を履いていた人となる証拠を得たかつたんでしようが、どちらにせよ王子と顔を合わせた時に舞踏会で出会った人ではないと言われてしまったら罪に問われることぐらい理解出来ないのでしょうか？

事実、義姉達と義母は自身が家で使用人のようにこき使っている存在が舞踏会に来れる訳がないと断言できるので、王子の使者に主人公の存在を隠すこと自体反逆罪に問われます。

そんなことよりは主人公が舞踏会の当日に来れない事情があった、と使者に伝える方が最善です。

どちらにせよ、舞踏会の夜に主人公と出会った魔法使い以外が

主人公が舞踏会に行った証明は出来ませんし、そもそも魔法使い以外で主人公が舞踏会に行った証明が出来る存在は人間ですらありませんので、やましい事がない証明としても主人公を王子の使者から隠すことはしなかった方が良かったでしょうねと、

ミサカはシンデレラを読んだ感想を告げます」

「…ちなみにサンタクロースは」

「ただの不法侵入者ではないのですかと、ミサカは首を傾げます」

「上条さんが言える立場じゃないが、意図せず子供達の幻想を壊しに行ってるだろこれ」

13577号<sup>自</sup>以外の四人が頭を抱え気味な中、不意に視界へ入ったシンデレラの表紙に気になるものがあり、絵本を手に取りました。

「：兎」

「兎がどうしたんや？」

「兎が、寂しいと死んでしまうというのは本当でしょうか」

シンデレラの表紙に描かれていたのは一羽の白い兎、アルビノではないかと思う程の白い身体に赤い目があり、“可愛らしい”……これは好きと分類されるのでしょうか。

「科学的には違うそうだけい、野生の兎は基本的に単体で行動するしにゃー」

「兎が気に入ったのか？」

「そうですね…」

特に、寂しいと死んでしまうという噂がある兎が

「多分好きですと、ミサカ<sup>自</sup>は改めて思います」

「多分かよ」

## 一方通行な心情とX

八月十四日の深夜、実験が大抵夜だったせいで：不覚にも一瞬だけ、ほんの一瞬だけ目の前の妹達造りものの一つがこの間のコスプレ女に見えたんだ。特に後ろ姿が似ていた気がする。黒い髪を背中まで下ろして、ああでもあの女自身はもう少し身長が低かったような。

そんな余計な考えが頭によぎったことで、妹達造りものの腹を蹴った時の威力を間違える。妹達造りものが沢山あるコンテナの一つにぶつかって、コンクリートの地面に落つこちたと思つたら吐きやがった。

酸特有の鼻にくる臭いに顔を顰め、舌打ちをした後にもう一度蹴つて殺壊した。

少し気に障った実験の帰り道、きつと誰もいないであろう公園の横を通り過ぎて、いつものようにマンシヨンの一室に帰る筈だった。

「あの」

誰かの声が背後から聞こえた。俺に声をかけるヤツなんて、余程の馬鹿か死にたがりだけだ。きつと違う誰かに声をかけているんだと思ひ、マンシヨンに向かって歩く足を止めなかった。

「え、あ、待つてください…と」

声をかけられているヤツに早く反応してやれと、内心で思いながら公園を完全に通り返る。どんな物語シナリオの悪党ヒールでも、正義ヒーローの味方ローの準備シーンくらいは待つてやるもんなんだから、声に振り向いて数分立ち止まるくらいやれ、とか色々と思うことが頭を埋め尽くす。

「と、止まって、止まってく下さい」

薄情なヤツがいたもんだと思いつながら足を止めなかった。

当然そう時間がかからない内にいつものマンションに到着し、いつものようにマンションの一室の鍵を開け、いつものようにその扉を閉める筈だった。ガタン、と扉が閉まらなくなるまでは。

扉が閉まらないことに気付き、目の前の相手を見た。

マンションの扉と壁の間に、滑り込むかのように挟まっている足の相手。

「足、邪魔なんだよ。さっさと退かせ」

それは俺が公園を通るようになった原因の女で、病院のベランダに置いていく際について触ってしまった時と同じ、長い黒髪を靡かせていた。紅色の両目がハッキリと俺を捉え、視界に入れたことは二度目：いや、もしかしたら一度目かもしれねえが。

「嫌、です…！」

その両目に痛みによる生理的な涙の膜を浮かばせながら、女は俺を見ていた。身長が俺より低いことで必然的に上目遣いになった女の目線は、睨み付けるとまではいかなくとも俺への反抗心のようなものを感じ取れた。その態度を振じ伏せさせたいと思う思考を急いで掻き消す。

「はア？こっちはな、オマエの足ごと折って扉閉めたって別にイイってこと、分かんねエのか？」

少し過激だと、理性が訴える思考によって生み出された言葉が口から出て行く。内心で逃げないで欲しいとか思っている俺を叩き潰す。俺が能力異能を使ったらきつと、そのほつそい足も腕も折れて使えなくなる。だからか、能力異能を使う気になれない。

「なら、折ればっ…う、いいじゃないですか」

恐らく強がって言ったであろう女の言葉に、頭ん中が真っ白になりかける。足を折ってしまえばいいという言葉に対して、否定なのか肯定なのかは俺自身にも分かりにくい。ただ強いショックのようなものが瞬間的に走って、何処かに消える。

「…そもそもオマエ、俺になんの用があつてここまで来てンだよ」

マンションの扉を閉めようと力んでいた腕から力が抜け、ついに扉の取っ手から手を離してしまった。当然女も足が扉にずっと挟まれているのは辛いのか、片足で器用に扉を半開き状態にする。

ああ、まずい。そう思いつつ、顔が見えないように俯きながら壁にもたれかかる。

「お、お礼がしたくて…ですな」

そう言つて女が引つ張り出してきたのは、何故これにしたんだと思う程に大きめなスイカ。それも一人じゃ食べきれないくらいのサイズのだ。別にスイカは嫌いじゃねえが、甘いものが好きって訳じゃねえ俺にとっては流石に多すぎる。このスイカは一人じゃ食い切れねえつての。

「ンで、本来の目的は？流石にお礼だけでスイカ渡しに来たンじゃねエだろ」

俺の言葉に女の肩が大きく揺れる。…まあ、そりゃあお礼にしては  
かなり強引だったし、別に直接俺にスイカを渡す必要がないからだ。  
いくら公園で俺がずっと無視し続けたとはいえ、インターフォン越し  
にスイカ置いてくことくらい伝えられるからな。

「あ、あのですね……友達になって欲しくて…」

「おい待て、どオしてそオなったんだ」

おい待て、どうしてそうなったんだ。俺の中ではどうせ研究所から  
グチャグチャ文句かなんか言われて、二度ともう会えないとかそうい  
うのかと思つてたんだが……。なんだそれ、意味分かんねえ。しかもな  
んで友達とか微妙な立ち位置になりたがる。

俺が困惑のあまりに思ったことが口に出ていたようで、目の前の女  
が首を傾げる。冷静な頭は目の前のコイツがいると良くないと判断  
しているのに、心の中では離れないで欲しい拒絶しないで欲しいと手  
を伸ばす俺がいる。ああくそ、コイツがいると俺の調子が狂わされ  
る。

「でも、最初はお友達からだと…知り合いの方に言われたんですよ」

実際さつきから何度も演算しようとして繰り返してんの、どうしても  
解<sup>答え</sup>が出ない。目の前の弱そうな存在が邪魔だと演算<sup>否定</sup>を繰り返して、ま

た解が $X$ に掻き消されていく。 $X$ に俺自身も何が当てはまるのか、単に未知数なだけなのかは分からない。

「…ああそオかよ、勝手にしろ」

「！、ありがとうございます」

悩んだ挙句、女の行動を許容した俺は、結局絆されているんだ、きつと。

いつもの俺であれば、こんな行動を他人に許すことなどない。

「では、スイカを切る為に家に上がらせてもらいますね」

…それをもうちよつと先に言えと、思った俺は悪くないだろう。

## 一方通行な苦悩と現実

八月十五日の夜、妹達造りものの実験を止めようと乗り込んできた第三位の……ああ、そう御坂美琴だった。ソイツが放った超電磁砲レールガン主にゲームセンターのコインに電磁加速を加えて放つ技で毎分八発、音速の三倍以上の速さ。空気との摩擦熱で弾が溶けてしまうため射程は50mと短めだが、威力や撃ち出す質量を加減すれば射程を延ばすことも可能を弾き返した時の顔は傑作だったなあ。とにかく今日の俺は気分が良かった。……いつものマンシヨンの扉を見るまでは。

「あ、遅いですよ……と」

いつものマンシヨンの扉に背中を預けて座り込んでいたのは、昨日の夜に現れた女。昨晩は着ていなかった兎の耳が付いているダウンジャケットを軽く羽織り、俺よりも一回り程小さい両手は、ホットココアの缶から暖を取るように抱え込んでいた。

公園で見かけていた時からずっと下ろしていた髪は、一本の複雑な三つ編みにされていて、白く細い首筋がダウンジャケットから垣間見える。それに昨日とは違って短パンで来たのか、血の気が通っていないながらも流線的な足が見えていた。

「……オマエ、頭イカれてんのか？夏にホットココアは飲まねエだろ」

夜で気温が下がったとはいえ、近年の夏は三十度を越す勢いだ。そんな中、いくら寒がりだからと言ってもホットココアを飲む馬鹿はいねえ。それに加えてダウンジャケットを羽織ってんだ、夏風邪でも引いてんのか？

そう思っただけで言ったが、俺の言葉に対して女は不満だとばかりに、ト



ントンと軽い足踏みをする。

表情は大して変わったように見えねえが、目付きは何となく半目になっていような気がする。

「自分だって別に、夏にココアを飲む習慣がある訳ではないですよ。ただ貴方を待っていたら少し肌寒くなったので、：仕方なかっただけです」

まるで拗ねているような態度に内心驚きのようなものを感じながら、ため息を吐く。

主に呆れと、俺自身の感情を落ち着ける為に。

「つつかさア、昨日の時間にお礼とやらは受け取ったことになってんだろ」

「：引越し時の段ボール等が放置、指定の曜日に出すのを忘れてたであらう缶コーヒーの入ったビニール、エナジードリンク系ばかりの冷蔵庫：それでもまだ聞き足りないですか？」

目の前の女の言葉に、自覚はあった俺は自ずと黙り込む。事実昨日家に上がると言つて、家に入った女は室内の惨状に狼狽えていた。あれはあれで見ていた俺からしたら面白かったがな。

「余計なお世話だな」

「それくらい分かっていますよ、ですが顔見知りになった相手が不健康で死んだなど、夢見が悪くて放っておけません」

女はそう言い切ると俺の立っている方へ、俺に視線を合わせて見つめてくる。

昨日と何ら変わりのない紅色の目は、俺の断ろうとした意志と言葉を優しく曲げていく。何よりもイライラするのは、一方的に否定されないことで攻撃的になれないことだ。蜂蜜のようにゆっくりだが、染

み込むかのように溶かされているようで、無性に悔しくなる。

科学反応で言うところの、中和されているかのような感覚がずっと心の片隅に残っていやがる。

俺が立っているだけで、ヒリヒリピリピリと突き刺さってくる敵意や殺意でもない。

吐き気がするくらいガワだけ正義感ヒーローに染まり切ったやつが持つ、俺の根本的なものでさえも溶かし尽くすような偽善世間体でもない。

「元から自己満足でいいから来てるんですよ」

どう表せばいいのか分からない……ただ隣に居て、泣いてもいいと許してくれるような何か。

楽しいことがあつたら互いに話して笑ったり、辛いことがあつたら話を聞いてくれる、ような。

ほんやりと考え事をしていたせいか、思ったことが口から出ていく。

「…オマエの言うお友達ってのはよオ、相手のことなんて考えてねエヤツのことなのか」

しまった…とは、思った。だけど女はキョトンと惚けたような顔をした後に、にこやかな笑みを浮かべて俺を見た。

「それは違いますね。自分の知人曰く、その人にとって良い友人であるか否かは本人が決めることらしいので、貴方から見たら友人とは思えないような関係性であっても、本人達はそう思わないそうです」

女はこっちが見惚れるようなにこやかな笑みから一転、言った言葉に反比例するかのようになり、期待という言葉のきの字もないようなニヒルな笑み口は微笑んでいるが、実際に嬉しかったり喜んでいるのではなくどこか絶望をしているような冷めきった笑みを作っていた。

「…結局のところは、オマエも信じてねエンじゃねエか」

「あ、バレてしまいました?」

「喋ってる内容の割に、顔が笑ってねエからなア」

わざとかどうかは知らないが、女自身もあまり笑みに自信がなかったかのように言うもんだから、まるでつい最近まで笑うことを知らなかったんじゃないかねえかと勘違いしそうだ。

マンシヨンの扉の前で座り込みながら、あーでもないこーでもないと言いながら、女が自分自身の口角を上げているのを見て、俺もふと流れで口元に触れた。

「…でも、ありがとうございます」

「は?急になんだよ、気持ち悪リイ」

「失礼ですね…歴とした感謝を言っているんですよ」

この女に礼を言われるようなことは、病院に置いてつたくらいしかしてねえ。

そう思っただけで即座に否定するも、いつものように言ったことで言葉自体が刺々しくなる。

けれど女は怯まずに会話を続けた。

「表立って誰かに信用できません、なんて堂々と言えないじゃないですか」

「俺はそオでもねエな」

俺の場合、周囲なんて気にしていたら食い潰されるような状態だった。ちよつとでも人を信用したところで、すぐに裏切られるからいつの間にか誰も信用出来なくなった。俺の意志をどうにか強く保たないと先に進めない程だったもんで、必然的に周囲を気にしなくなっただけマシだった。

「ああ…確かに、貴方は世間体とか気にしないタイプっぽいので、言いそうですね」

「オマエ、周囲のヤツらばっか気にするタイプだろ」

「…気にしないで生きられたら、楽なんですけどね」

そう言っただけで女は急に立ち上がり、身体を上には伸ばした後にダウンジャケットを脱いだ。

「さて、ここですつと話していても何も変わりませんので、素早く家の掃除などをさせてもらいますよ」

俺は渋々とマンションの扉を開けたのだった。

女はビシツと、飲んだ後のコーヒー缶で満杯なビニール袋を指差して言った。

指差して言われなくとも、元々資源ごみで捨てる予定だったから俺が纏めてたんだがな。

…忘れて放置してる人が多いだけで。

「コーヒーが好きなのは分かりましたが、自分自身でコーヒーを淹れるという考えはなかったんですか…!?!」

「そんな暇がねエンだよ」

生憎だが、最近の时期的なもので俺に暇な時はない。絶対能力<sup>レベル6</sup>シフト計画も内容が内容だったんで、夜に実験が行われるから尚更だ。そもそもそんなことが出来る程、俺は器用じゃねえ。

急に手首を掴まれてキッチンに連れて行かれたと思えば、いつも一杯になっっている冷蔵庫を少し震えながら指差して言った。：別に指差して言わなくとも、大体言いたいことぐらい分かってんだよなあ。

「何故、冷蔵庫に食材がないのですか：??？」

「オマエの目は俺が自炊するよオに見えてンのなら、オマエはもオ一回病院行った方がイイ」

「：ですよね」

コーヒーと理由は大して変わらねえが、手間暇かけられる時間もなく、まず自炊すらしたことねえヤツの冷蔵庫に食材があるとでも思ってたのか？俺は絶対に思わねえ。

「：…というか何でエナジードリンク等はあるのに、野菜ジュースの一つもないんです？栄養バランスというものを義務教育の際に軽く聞いている筈では？それとも赤・黄・緑の三色で分けた表現の方が分かりやすいですか？」

我ながら耳が痛い言葉に顔を顰める。あとよくあんな短時間で冷蔵庫の中に野菜ジュースの一つもないことを確認したなコイツ。小中で習う三色食品群それぞれ三色に該当する食品をまんべんなく摂ることで、バランスの良い食事になるように考えられている円グラフのような絵とかよく覚えてるなオマエ。よく三大栄養素栄養素の種類を意味し、基本的にエネルギー源になる糖質・脂質・タンパク質のこととごっちゃになって三色栄養素とか変な言葉作るヤツだろ、俺はもう忘れた。

大五栄養素三大栄養素に微量元素であるビタミン・ミネラルを加え

たものとかもあつた気がするが、RPGとかで出てくる四天王的な感じだった筈…？

「好きなものだけ食って死ぬってのは幸せじゃねエの？」

「それが将来的に変わることには自分は賭けさせてもらいます」

「へエ、俺はそれが変わんねエ方に賭ける」

キッチンから聞こえるガチャガチャと鳴る作業の音を聞きながら、何を賭けるか考える。特段これだと思うような案もないままで、無難な案を口に出す。

「…負けた相手に、三回言うこと聞かせる権利なんてどオだ」  
「無難ですね」

互いに名前も知らないが、互いに名前すら知らないことで沢山の会話を交わしている時間が、酷く穏やかなものに感じるなんてだいぶ俺もイカれてきたな。

そんなことを思いながら夜は静かに更けていった。

## 方向転換をしたことで始まる異変

八月十七日、変化は起きました。

13577号<sup>自</sup>分が持たされている携帯には研究所への連絡先しかなく、知らない番号から電話が来るなんてことある訳がないのに、確かにあの日の夜に携帯に電話が来たんです。

『こんにちわ…いや、今はこんばんわ…か』

電話に出て最初は渋い男性の声で、少々荒々しい呼吸の音が聞こえました。

『先生、本当にこれでよろしいんですか？』

『ああ』

その次に女性らしき高い声が、“先生”と渋い男性の声の主を呼びました。

『13577号、君はこれから窓のないビルに来てもらう。申し訳ないが拒否権はない。君が抵抗すれば、ある程度攻撃して構わないと迎える人間に言っているのです、抵抗する際は多少の苦痛を覚悟するよう』

一方的に通話が切られ、13577号<sup>自</sup>分は状況が読み込めないまま、その場で立ち止まりました。13577号<sup>自</sup>分の存在を知っていると

うことは、絶対能力進化計画の内容も知っている可能性が高いです。ですが、研究者の大半は13577号<sup>自分</sup>を快く思っていないことが多かったです。

しかし、13577号<sup>自分</sup>のことを13577号<sup>製造番号</sup>で呼んだことから、相手は研究者で確定です。そして絶対能力進化計画を発案した研究者の名前は木原幻生<sup>きはらげんせい</sup>、あの木原の一人でした。

：絶対とは言えませんが、木原姓を持っている人間であれば13577号<sup>自分</sup>のことを知識欲を満たす為に呼び出すくらいしそうですからね。

そんなことを考えていると、背後から数人の足音が聞こえました。：もしかして迎えとやらが来たのでしょうか。そう思っって振り向き  
ました。

「よお、お前さんが13577号<sup>自分</sup>つてヤツか？」

話しかけてきたのはオールバックにした金髪と、顔によく分からな  
い模様がある男です。

「こんばんわ、確かに製造番号は13577号と認識していますと、  
自分<sup>ミサカ</sup>は迎えと呼ばれていた人物と思われる男性に答えます」

「ああ、そーゆー堅苦しいのいらねえから」

迎えと呼ばれた男は自分自身のことを木原数多<sup>きはらあまた</sup>と名乗り、  
13577号<sup>自分</sup>の方へ歩いて来たと思えば、いきなり13577号<sup>自分</sup>の顎  
を片手で自身の方へ向けました。

「さっすが突然変異、御坂<sup>情報元</sup>美琴と髪色・骨格・声帯・眼球色素：あとは  
身長がまるつきり違ってるなあおい」

木原数多から13577号<sup>自分</sup>へ向かう視線は、確実にいいものではあ  
りませんでした。



言い表すのであれば軽蔑に近しいものであったことは確かです。個人的には少々不快な視線であったことを記憶しています。

しばらくジロジロと観察をされた後、電話越しの指示通りに窓のないビルに13577号<sup>自分</sup>を連れて行きました。しかし、木原数多とはほとんど初対面でしたが、あまり会いたくない人間として記憶しました。

「君の目的はなんだ」

窓のないビルに入る直前に目隠しをされ、その状態で移動すること数十分後で13577号<sup>自分</sup>に投げかけられた質問でした。問題は質問ではありません。問題は、その質問をゴールデンレトリバーという人間と同じ声帯を持っている筈のない犬が話したことです。それも聞き覚えのある渋い声でした。

「目的、というのは具体的に何のことを言っているのですかと、自分<sup>ミサカ</sup>は目の前の喋っている犬科動物に驚きながら返答します」  
「そのままの意味さ。君は今、何の為に行動していて、その最終地点がどういうものなのか聞いているんだ」

視界の端で先程迎えと呼ばれていた木原数多の他に、見覚えのない老人と黒髪の女性に車椅子を押して貰っている茶髪の女性が映る中、13577号<sup>自分</sup>はあまりにも当たり前前のことを聞かれて、首を傾げました。

「絶対能力<sup>レベル6</sup>シフト<sup>アクセラレータ</sup>で一方通行に削除<sup>殺さ</sup>される<sup>れる</sup>ことです」

「いや…表向き理由ではなくて」

「いえ、表向きでなくとも行動の最終地点は絶対能力<sup>レベル6</sup>シフト<sup>アクセラレータ</sup>計画で13

5777号の削除死であり、突然変異イレギュラーとして生まれてしまった13577号の唯一役立てることだと認識していますと、自分ミサカは質問に答えません」

それは13577号自という突然変異イレギュラーが布束砥信の足を引つ張らずにいられる手段です。

「妹達シスターズはその為に製造された存在であるが故に、突然変異イレギュラーとして生まれたからという理論で実験から逃れることは製造された意味を否定します。確かに削除死は恐ろしいことだと認識していますが、それでは突然変異イレギュラーである13577号を残しておいた布束砥信という研究者に申し訳が立ちませんと、自分ミサカは言葉を続けます」

そんな中、静かに黒髪の女性に車椅子を押して貰っている茶髪の女性が、会話に割って入りました。

「貴女イレギュラーが突然変異として生まれて来たことで、無駄になったものがあることを知っていますか？」

「それは」

「そのいち、培養費諸々。それに、人員費諸々。そのさん、貴女にかけて時間が該当します」

茶髪の女性が言葉を言い切ると、ずっと閉じていた自身の両目を開きました。

その両目は幼い子供が黒いクレヨンで塗り潰してしまったかのよう  
に光がない目で、焦点が酷く分かりにくい目でした。

「なーのーでー…正直、布束砥信という方々ごと諦めて死んでくれませんか？」

視界の端でパチパチと、聞き覚えのある音が聞こえましたが、

13577号はそれどころではありませんでした。下っ腹の辺りが燃えるように熱く、逆に頭は硬く凍て付いていました。なるほど、これが“怒り”というものなのですね。

「彼女、貴女に感化されてしまったみたいでー…この間から絶対能力進化計画の邪魔をされているんですよ」

ガツンと、頭を殴られたかのような精神的衝撃が13577号を襲いました。布束砥信が、いなくなっただと思っていたあの人が、13577号に感化されたと言うのですか…？そんな訳ありません…あの人は他が思っているよりも

「それに彼女が御坂美琴と接触してしまったことで、御坂美琴も絶対能力進化計画を邪魔しに来ているんですよ。諦めの悪い人達ですよねー」

御坂美琴、その単語が目の中の女性の口から出て行き、“諦めの悪い人達”と言われた途端、全身の水分が沸騰しているかのような強い熱を帯びました。学習装置から入力が行われていた理性は、必死に荒ぶる“感情”というものを押さえつけていました。それも長くは続きませんでした。

抑え切れなかった“感情”が茶髪の女性目掛けて、欠陥電気能力的にはオリジナルの1%にも満たない程度、実力は2万人集まってもオリジナルに敵わない程度による一時的な移動速度の加速を行いました。練習したことのない方法で、人に向けて欠陥電気を使用したことなどありませんし、トランス状態通常とは異なった意識状態になる可能性があります。

素早く茶髪の女性の元へ移動し、胸ぐらを掴んだ状態で床に叩きつけました。

茶髪の女性からの抵抗はありません。何故なら移動中の13577号を観測できる存在はいないからです。本当ならば勢い

を付けて踏み付けたいところですが、今回は初対面であつたことも考慮し、内臓周りの生物電気の流れに異常をきたすだけになりました。  
レディオノイズ  
欠陥電気の使用を停止すると、当然のように車椅子に座っていた茶髪の女性は13577号自分が叩き付けた床に転がり、次に内臓の生物電気に異常を起こさせたことで苦しみだし、数秒後に鼻血が出ました。茶髪の女性はその真つ黒な両目で13577号自分を見ましたので、13577号はにつこり笑って見せました。これが“皮肉”というものなんでしょうか。

「諦めが悪いのは一体どちらなんでしょうか」

「貴女…、今…何を」

「初めて人に欠陥電気レディオノイズを使用し、内臓の生物電気に異常を発生させましたと、自分ミサカは木原病理きはらびょうりの質問に返答します」

そう…“内臓”と一纏めに表現はしたが、明確に言うならば“筋組織以外の組織全体”に異常をきたすようにしたので、当然脳は筋組織で出来ているものではありませんので、脳が発している電気的信号から、目の前の女性が持っている名前や記憶といった情報を読み取ることも可能です。

「13577号自分は最初こそ他の妹達シスターズと大差ない存在でしたよ。ただ、学習装置から入力が行われていなかった“悪意”を研究者から向けられたことで、自らの意思を形作つたんです。特に木原病理、貴女のように突然変異イレギュラーであることを批判してくる研究者のおかげです」  
「私は…、諦めを司っている木原…だから貴女如きの意志を折るくらい、簡単に」

「…何を言っているんですか？13577号自分が突然変異イレギュラーとしてなりうるまでに、様々な可能性を潜り抜けていることぐらい、木原ならば理解していますよね？」

「な、に…を」

「…ふむ、木原といえど理解力自体はそれぞれで疎らなんですね…」

つまりですよ、突然変異<sup>イレギュラー</sup>として製造された13577号<sup>自分</sup>は、存在<sup>生きて</sup>している可能性の塊に近いんです。そんな13577号<sup>自分</sup>に、諦めが通用する訳があるとお思いですか？自分自身が、諦めという言葉を否定するような存在なのにですか？」

そう一方的に突き放して、先程まで会話していた犬科動物らしき相手に向き直って口を動かしました。

「それで、何の御用でしょうかと、自分<sup>ミサカ</sup>は犬科動物らしき相手に話しかけます」

## 一方通行な恐怖と内通

八月十五日の夜、マンションの扉の前に座っていたあの女と出会ってから、俺が住んでいるマンションの一室の前に女が隙あらば座っていた。八月十六日は同じく扉の前で座り込んでいて、何故か八月十七日はマンションに入る前で会った。

会話を重ねる度に、波長が合うヤツと共にいる時間が穏やかだったことを思い出す。名前を互いに教え合っていないからこそ、俺はあの時だけ――「――」だった時と同じようにいられた。

例えその会話が、食生活を改善しろだの日に家中の外に出る時間を増やせだの言われるものだったとしても、俺が化け物を見るような目で見られることのない時間だった。ただ純粹に俺自身を心配しているような言葉や、一方通行アクセラレータとしての俺には向けられることのない感情に漂っていられた。

八月十八日の夜、いつものように絶対能力レベル。シフト進化計画での実験を終了させて帰って来た俺が、あの女とマンションの扉の前で会うまでは。

いつものようにマンションの扉の前に座っている女を見つけ、声を少し離れた辺りから掛けた。

「なあ、オマエいつまで」

俺が声を掛けた瞬間、女は俺がいる方向を声を頼りにして向き、駆け寄って来た。そして、喋ろうと思っていた言葉を言い切る前に俺は俺に抱き着いてきた。パニック状態になりかけている内心をどうか抑え付けながら、少し震えている女を引き剥がそうと女の肩を掴んだ時だ。

「…すいません、しばらくのあいだ…こう、させてください」

女の声から俺と話している時特有らしい澆刺さが消え、若干鼻声気味で返ってきた言葉に肩に置いた両手が止まる。どうして女が今の状態になったのかなんて俺には分からねえが、今はこのままにしておいた方がいいことぐらいは理解できた。…理解、できたんだがな。

十中八九、女が不安定な状態にあることは分かっているが、分かっているが…。まるで猫がお気に入りへの存在に対して頬擦りをするように、頭を胸元に擦り寄られると俺の心拍数がバレてしまいそうで怖い。それと単純に距離が近い。

真夏の夜ということもあり、さほど時間が経たない内に体温の方が外気温よりも上がってくる。

女の肩に置いた両手はどうにもできないまま、暫くと言った言葉の通り、女の方から離れるまで大人しく抱き着かれていた。

「…ごめんなさい、ビックリしましたよね」

いつもであれば、色白な肌が紅色の目を引き立てているだけだったが、今日は女の目元が少し赤くなっていた。擦って腫れたであろう目元で、心なしか鼻声気味だった理由が推測できた。

泣いたんだ、目の前のコイツは。

「そオだな、オマエが通り魔かなンかで、ブツ刺されて死ぬのかと思っ  
た」

「う、…」

女がナイフ等の刃物を持ってねえことぐらい、駆け寄って来てる時点で分かった。

それにもし俺が通り魔に刺される状況下に置かれたとしても、反射

したことで刃物が曲がっちゃうから出来る訳がねえ。

「それになア…俺が言うことじゃねエが、オマエさア…他のヤツともこんな距離感なンかよ」

「…この間、信用できるできないの話した自分が、そんなホイホイ他人に接触していると思うんですか？」

先程よりは距離がコイツと空いたとはいえ、やはり俺より身長が低いからか自然とコイツは上目遣いになる。それについてさっきまで、足を動かさなくても届く距離にいられたこともあり、コイツが言っている内容の意味が、きつと言っている本人が意図した意味と違う意味に聞こえんだが…。

「してンなら俺もオマエに仕返して噛み付いてる」

「…どうしてそこで噛み付く話なんです？接触の話…でしたよね？」

「分かんねエならイイ」

目の前のコイツに俺が言ったことの意味を理解していない事実で、安心やら不満がごつちやになる。喜んでいいのか、悲しめばいいのかよく分かんねえな…。泣いた理由を聞けない事に不満を抱き、気持ちを落ち着ける為のため息を吐いて、また俺はマンションの扉を開けた。

女が珍しくグツタリとりビングの適当な場所に座り込む姿に、つい口から思っていることが出ていく。

「…珍しいこともあるもんだなア。オマエがここに来て、俺に色々



言ってこないのはよオ」

「人のこと、スゴい文句言ってくる存在みたいに言うの、やめてもらってもいいですか…」

「嘘は言ってるねエ」

「…いや、そうですけど…そうなんですけども」

女は少し休憩をした後、またいつものようにキッチンに立った。

…俺としてはあのままでもよかったんだがなあ。

確かに俺の食生活は、今キッチンに立ってるヤツのおかげで改善した。

俺自身も気にする程度で構わないと言われたことで、あまりストレスとしていない。

だが多分、一番食生活を考え直すことにした原因は…

「…おい、飲み物出さなかったらコーヒーに」

「ダメです。夜なのでコーヒーは出させん」

「オマエは紅茶飲ンでんのか…」

「う、…すみません」

いつの間にかキッチンでの作業が終わったらしい女が、俺の前にホットミルクを置いて行った。

そんならコーヒーを出して欲しかったと文句を言うと、夜にカフェインのある飲み物はダメだと却下された。その割には女の持っているグラスからはほんのりとアールグレイの香りがして、それを指摘してやった。

「まあ…その、今日はあまりいい夢を見られそうになかったの…」

「俺にはダメダメ言う割にはオマエも人のこと言えねエだろうが」

「…：…分かりました、今日だけですからね…!?!」

内心で勝利を確信した。：つーか、いつの間にアールグレイなんか俺の家に入れてんだアイツ。

そんなことを考えながら数分経つと、キッチンから新しくグラスをを持ったヤツが戻る。

グラスを受け取るとカランと、氷がグラスにぶつかる音がした。

どうやら俺の知っているコーヒーとは違う味だ。

コーヒー特有の酸味や苦味が、全くいなくなった目の前の液体に少し困惑する。それに口当たりがよく、冷えていることもあつてすぐにグラスの中身がなくなる。

「…水出しコーヒーって言うんです。時間は掛かりますが、ずっと面倒を見る必要もないので貴方でも作れると思います」

いつの間にかおかわりがグラスに注がれていて、水分よりも比重が大きい氷がまたもやグラスとぶつかる音がした。

「だから…その、代わりと言っては、アレですが…」  
「あ?」

カランと、グラスの半分くらい飲んだアイスコーヒーの中に入っていた氷が、時間差で溶けて音を鳴らした。その間、目の前のコイツは、口に出す言葉を迷ったかのように唇を軽く噛んでいた。

「……今日は、自分を寝かささないでくれませんか」  
「…は?」

言葉選びに迷ったっぽい後で言った言葉に、思考が説明も出来ねえくらい困惑した。いや、考え直しても色々と言弊が出来るような言い方…だと思う。…多分、そうだと思えてえな。

語弊じゃねえ場合はなんだ。何となく理解は出来るが、…そういうやつを、やるのか…?それかいつそ悩んでるよりかは直接聞いた方が楽か??

「オマエ…:それどういう意味か、分かってんのか?」

「え…と、確か寝ずに会話を続ける…:という意味だと思ってるのですが、違いましたか?」

ああ、コイツ…:とことん分かってねえな…:。

「で?…:それをどこで学んで来やがった、オマエ」

「知り合いが、自身の友人に対して言っていましたね。その日は、絶えず共通する趣味の会話をしていたので、てつきりそのような意味合いだと思っていましたか…:」

その知り合いとやらに、とてつもなく会いたいもんだなあこれがよお。語弊を生むような言い方をコイツの前でしやがってさあ…:、おかげでとんでもない勘違いをるところだったなあ!!!!

「……………夜の誘いだ」

「え?」

「オマエが言った言葉の、一般的な意味」

「…つ、つまり??」

「言った相手に対する性行為の誘い」

数秒固まった後、自身が言ったことの意味を理解できたのか、目の前のヤツの顔面が赤くなっていく。湯気が出てんじやねえかと、思うくらいに火照った頬は桃のようだった。

先程は軽く噛んでいた唇は、照れや慌てでふるふると震え、何かを言おうとしては、パクパクと開いて閉じてを繰り返している。：かわいい、そう思うのも仕方なかった。

「や、あの！ち、違いますからね!?!いや違わないんですが、違いますからね!!?」

……そりやあ俺もコイツも、出会って話すようになってから、そんな時間は経過してねえし、まあ当たり前のことだ。そう、当たり前のこと、なんだが…。

「い、一緒に夜の行動を共にすると、いう意味合いとしては違わないのですが…。あ、あくまでも会話であって…その、：男女のそういう行為の誘いではなくて…ですね」

そうも必死に否定されると、心臓に槍がぶつ刺さったんじやねえかと勘違いするくらいに、胸が苦しい。コイツが提案したように、俺とコイツの関係は友達であって、決して男女としての関係じゃねえ。そんなこと、とつくに理解してんだがな…。

「そ、それに…：自分の心の準備というものが、整っていないので、まだ………だめ、です」

バツと、目の前のヤツの言葉に目を見開いた。待て、”まだ”ってなんだ”まだ”って…：それに、自分の心の準備が整えばいいってことか??

チラツと、ヤツの目線と合わないようにヤツの顔を見る。分かりやすく赤面ながらも、本気で嫌そうな顔をしている訳ではなさそうだった。

…むしろ若干……と、考えた辺りでこれ以上考えるとマズイ気がして、湧き出そうとする欲求をどうにか振り払う。

駄目だよく考えろ俺。目の前のコイツは、絶対能力進化計画での  
妹達造りものとそう大して変わらねえ身長のヤツだ。それによくよく考えれ  
ば、友達になつて欲しいとか意味不明なこと言つたヤツだろうが!!  
その日、少し引つかかるものがあつたことを、深く考えたくない  
という意志で知らないフリをした。それが未来の俺に、どんな影響をも  
たらすのかも知らず、俺とヤツは会話を続けたのだつた。

## 方向転換したら未元物質と街角衝突

八月十七日のあの日、窓のないビルで語られたのはこのようなものでした。

「いいかい、君には明日から特例の暗部隊員として活動してもらおう。基本的な支援は木原一族がするから、そこは気にしないでいい」

「13577号が理由を聞くことは可能でしょうかと、ミサカは質問をします」

「簡潔にまとめるのであれば、我々研究者から見ても13577号：君の戦闘能力は未知の領域に近しい。それに君自身が何せ前例がなく、後天的な例を生み出そうとも出来ない存在になってしまったからね。こちらとしても君のデータが欲しい」

13577号は突然変異生物やウイルスがもつ遺伝物質の質的・量的変化を起こした妹達の個体、つまり他の妹達と身体的データも精神的データも別物に近いものです。そんな当たり前のことが頭から抜け落ちていたことに危機感を抱き、一方通行との接触でぬるま湯に浸かっていた幼い感情らしきものを立て直しました。

13577号は一方通行と会話を交わす度に、まるで本当に13577号が人権を持った人間のように感じて、本来の目的では必要としない行動を取るほどになっていました。だから13577号が人間のように生きたいと思うようになり、本来の目的を忘れかけているのでしよう。

「それに君が先程病理に言ったことが確かなのであれば、他の妹達にも君と同じような扱いをした際に、似たような変化をもたらすかもしれな」

「これ以上侮辱を重ねるのであれば、こちらも相応の対応をしなくてはならないのですが、それでも以上の発言を続けますかと、ミサカは目の前の研究者を威圧します」

目の前の“先生”と呼ばれていたゴールデンレトリバーの発言に、再度怒りの火が灯ります。

恐らく先程の言葉に続く発言は、“他の妹達シスターズに悪意をぶつける実験”といったような言葉でしょう。少なくともそれに該当する発言をしかけていたのは事実だったので、少し大きめの声で発言を遮りました。

「おいジジイ、そいつ造られただけの存在だつてのにマジのガチで怒ってやがるぜ。コイツの手首に付けた簡易脈拍計測器の数値が上昇してるからなあ」

バチバチと、視界の端でとても小さな電撃が発生しては床に向かって消えています。珍しく一つに纏めていた黒く長い髪は電磁波によってふわふわと広がっていて、まるで逆立っているようでした。

「……造りものの分際で……!!!」

怒りの火種に薪を焚べられて、次第に静電気程度だった小さな電撃が木原数多の持つていた謎の機器に向かって飛び、機器を無惨に破壊しました。

「先生、いいんですか放っておいても。13577号、またも周囲に電気を振り撒き始めてますよ」

「すまない、このような言い方は君の気分を損ねるようだ」

「………木原病理といい、先程の発言といい……三度目はありませんと、自分ミサカはなんとか怒りを押し堪えます」

「二応言っておくが、この提案は君のデータをこちらが得る代わりに、他の妹達シスターズに君のような存在を生み出す為の実験を行わない契約を結ぶためのものだ。基本的に一定の指示に従ってくれば文句は言わない。扱いは木原数多の直接的な部下のような立場になる、それで

も構わないならば八月十八日の夕方に指定した場所まで来てくれ」

そう、ここまでが八月十七日に窓のないビルで伝えられた事です。そして13577号<sup>自分</sup>は以上の提案を了承し、契約を結んだので八月十八日の夕方：つまり現在進行形で目的地に移動中でした。

「よう、こんな治安の悪いところにガキ一人で何のようだ？」

向かっている最中で垣根<sup>かきね</sup>帝督、学園都市に存在する超能力者達のラ  
ンキングで二位という驚異的高さに立ち続けている存在に出会っ  
てしまわなければ、指定された時間前に目的地に辿り着けていたで  
しょう。本当になんでこんなところに居たんですか…。

「……こん、にちわ」

「呑気に挨拶する余裕があんならとつと家に帰れ、ここはガキが一  
人で来ていいところじゃねえからな」

まさか出会うとは想定していなかった相手と出会ったこともあり、  
13577号<sup>自分</sup>は事前に送られてきていた変声<sup>ボイスチェンジャー</sup>機が稼働しているか



確認し、咄嗟に挨拶を述べると、13577号が想定していたよりも常識的な言葉が返ってきました。

そのランキングで一位を保っている存在の性格が荒々しかったことと、超能力者は自分だけの現実が強固であればある程に強者なので、やはり捻くれた性格なのかと予想していました。

しかし13577号を子供だと認識しているからとはいえ、まさか一人行動の注意喚起と帰宅を進められるとは思っていませんでした。

「…あなたは、かえらないんですか？」

「お前が帰った後に帰んだよ」

…思った以上に帰らせようとしてきていたので、170はあるかもしれない垣根帝督の身長を利用して素早く横を通り抜け、垣根帝督が進ませないようしていた路地裏の先へ走りました。

当然背後からは垣根帝督の声が聞こえましたが、時間は原則守るようになると学習装置から教わっているので、仕方ありませんよね。

御坂美琴と同じ運動神経を駆使して路地裏までの道にある障害物に登り、そのまま目的地に近い別の障害物の上へ飛び乗り、何度も何度も障害物を猫のように乗り継ぎながら移動しました。

念には念を入れていつもと違う装いであるせいか、所々で服の端を引っ掛けたりしながら垣根帝督から距離を取りました。

脇腹までの黒いローブフードの下に若干灰色っぽい黒のノースリーブワンピースを着て、靴下は白の膝上までのニーハイに黒の厚底お嬢様系ロリータ靴が映えますが、とてつもなく走りづらいので今度はガッツリ運動靴を履こうと思います。

そして最後にローブフードの下、つまり顔に黒猫のマスカレードマスクを付けているので、この姿で一方通行や上条当麻のような知り合いに出会ったとしても、きつとバレることはありません。…青髪ピアスには見られただけでバレる気がしますが、まあ大丈夫でしょう。

「…随分遅いと思ったらよお、なーんで垣根帝督第 二 位を連れてやがるんだ？」

「…せつめい、めんどくさ、いので、いいたく、ないです」

「あーそ、まあ垣根も呼んだの俺だから、結局お前は遅刻しただけだな」

「やはり、きはら、いちぞくは、きらいです」

先に目的地に到着していた木原数多から、垣根帝督に米俵のように担がれて到着したことをしばらく指摘されたので、腹いせに近くにあった金属製の物を投擲してやったのは我ながらよかつたと思っています。

方向転換して、弱音を吐きたくなる

13577分<sup>自</sup>号が過去に見た、一方通行に<sup>アクセラレータ</sup>削除される妹達の<sup>シスターズ</sup>ように、目の前で悲鳴をあげている人が木原数多の手によって殺害されていきます。しかし、あまりにも殺害方法が酷いことから視線を逸らすことも出来ないまま、13577分<sup>自</sup>号の身体は緊張で硬直していました。

「おい、そつちも逃すなよ」

ビシヤリ、と13577分<sup>自</sup>号の立っている地面スレスレまで、赤い血飛沫が跳ねました。ドス黒い血液と鮮やかな血液が、殺害されたばかりの遺体の近くで入り混じりながら広がっていました。血液に含まれるヘモグロビンが、暗い筈の路地裏を見る13577分<sup>自</sup>号の視界を鮮やかに彩りました。

視覚は夕焼けの空を背景にした路地裏に広がる赤色、聴覚に届くのはカラスが鳴く声に紛れた人の悲鳴と笑い声、味覚は緊張で口が乾いて血の味がするようで、嗅覚に刺激的な鉄分独特の臭い、触覚は新たに跳ねた血液によって湿る…白かったニーハイの感触。

クラリクラリと視界がアルコールでも摂取した後のように揺れ、耳に届く音の全てが遠のき、口の中は酸っぱくてヒリヒリとして、鼻は涙袋からの涙によって息がしづらくて、僅かに震えて13577分<sup>自</sup>号の上顎と下顎の歯がカタカタとぶつかりました。

「た…助けて、くれ…!!!」

「……」

「…凶々しいな」

グイツとワンピースが引つ張られる力に気付いて、足元を見ました。そこに居たのは、頭から血液を流しながらうつ伏せになっている男性でした。男性の焦げたような茶色の髪は血液で固まっっていて、頬には何かを掠ったような傷跡がありました。

「…あ？……まさかお前…」

突然衣服を引つ張られたことで声が出るかと思いましたが、喉を少し圧迫する変声機ボイスチェンジャーによってその声は防がれました。けれど、13577号自は男性の言葉に何も返せませんでした。何故なら今日13577号自がここに立っている理由が、しばらく暗部として行動することだったので、男性の言葉を叶えることは出来ないからでした。

「…はア……仕方ねえな…」

つまりは、男性を見捨ててはなりませんでした。この男性は人間で…性別が違えど、布東砥信のように自由選択が許された生活を送ってきたんでしょう。人口的なモノの13577号自よりも上位の存在で、自由な言葉も行動も許された存在です。

「オイ、そこのお前」

本来なら13577号自よりも上位の存在である男性を助けるべきで、見殺しなどすれば13577号自は燃えるゴミとして捨てられるで

しよう。

「なあオイ、聞こえてンだろ」

それだけ13577号<sup>自</sup>と男性の存在の価値は違いがあつて、きつと天秤で測つた時は男性の方が価値があるのでしようね。

「お前だつて言つてンだろ」

「…つなん…です。なんの、ようです」

いつの間にか13577号<sup>自</sup>の背後から肩を掴んでいた垣根帝督に驚いて、返事の初めの声が少し裏返りかけます。ずっと声をかけられていたようで、そのことに少し申し訳なく感じながら、垣根帝督が言葉続けるのを待っていました。

「お前、あの木原ンとこの新人か？」

垣根帝督が指差す先は木原数多の姿で、そしてその新人であるか否か…そう問われて、少し考えてあの喋るゴールデンレトリバーが言っていた言葉を再度思い出します。扱いは木原数多の庇護下に置かれると言っていたことを思い出し、垣根帝督の問いに対して返事をしました。

「…それが、なにか」

「人殺したことは」

「……、」

人間など日常的に殺害して何の意味があるのでしようか。そんなストレートな垣根帝督からの問いに13577号<sup>自</sup>は当然ある訳がありませんと、返事を返そうとは思つても喉から出るのは掠れた生暖かい空気だけでした。

「…ないんだな」

「ヒツ…だ、第二…い…………た、すけ…」

「テメエの意見は聞いてねえんだよ」

「つい…アが!!」

13577<sup>分</sup>号が何も言わなかったと解釈したらしい垣根帝督は、慣れたような手付きでうつ伏せ状態な男性の頭を鷲掴みし、傷跡のある背中を容赦なく踏み付けました。踏み付けられた男性の顔は恐怖で溢れ、情けなく助けを求める呟きがか細く聞こえていました。

「よく見る新人、首の真ん中から左右3cmまでのこの…張ってる筋に紛れて拍動があるのが外頸動脈だ」

「…い、やだあ…………助け、てくれ…!」

垣根帝督はその長身の身体を屈め、片手に鷲掴んでいる男性の頭を軽く上に引っ張り、まるで理科の授業などで行われるという、解剖実験をしているかのように説明する頸動脈は、皮膚の上からでは全く分かりません。

「…んで、この動脈は脳みそと繋がってるんだ。だから、こうやって圧迫すると…」

その頸動脈が脳みそと繋がっていると説明する流れそのままに、もう片方の腕を使って男性の首を絞め始めます。その動作や表情は作業的なもので、淡々と相手を苦しめたり殺害する為だけの技術なんだろう、と13577<sup>分</sup>号はすぐに推測できました。

「ツア…グエ…ギ…………」

対する首を絞められている側の男性は、口から唾液が溢れそうにな

りながらも抵抗を続けていました。必死に自身の首を絞め上げている垣根帝督の片腕を引つ掻き、剥がそうとしていました。

しかし、1秒ずつ時間が過ぎる内に顔が蒼白に変わりながら抵抗していた手が止まり、グツタリと意識を失いました。

「まあ…大体、子供の握力でも10秒前後は圧迫されれば、された相手は失神するだろうな」

「……そう、です、か」

垣根帝督の言葉に返事はしましたが、アツサリと垣根帝督は自身より一回りくらい体格の差がある男性を失神させてしまったことに、やはり学園都市の二位に立っている人なんだと思いました。

…そんな垣根帝督よりも、上位である一方通行アクセラレータになど、13577号自は一矢報いることができるのでしょうか…。

ジツと失神した男性を数秒見つめていると、垣根帝督が無言で何かを差し出してきたことに気付いて、とりあえず差し出してきた物を受け取りました。それはしっかりと手入れが施されたサバイバルナイフで、恐らく普段に持っていたら没収される程度の刃渡りがありました。

そのサバイバルナイフを右手で持ったり左手で持ったりして、握り心地を軽く確かめた後に垣根帝督に渡してきた意図を求めるところを見ると、サラツとその意図を話しました。

「今なら抵抗されねえから、さつき教えた頸動脈切つてソイツ殺せ」

「…え…」

「殺しつてのはやっぱ習うよりも慣れるだからな、お膳立てしてやったんだからサクツと殺れ」

13577号自へ返ってきた言葉に、サバイバルナイフを持つ手が急に

重たく感じました。このサバイバルナイフは余程鋭いのか、刃に  
13577号の顔がうつすらと映っていました。先程よりも持ちづ  
らくなつたようなサバイバルナイフの持ち手を両手で握ると、垣根帝  
督からため息を吐かれました。

「…あのなア、そんなンじゃ頸動脈じゃなくて肩切つちまうだろうが」

呆れたように話す垣根帝督の声にサバイバルナイフを持ったまま  
立ち尽くしていると、背後から誰かに抱き締められました。  
13577号よりも体格が大きく、身長が高いことから男性でしょう  
が……まさか、ですよね……？

「いいか、こう片手でナイフを持って…」

13577号の背後から、抱き締めるような体制をとっているのが垣  
根帝督だと分かって少しした瞬間、13577号の視界全てが赤で染  
まりました。ベツトリとしていて鉄分の臭いがするそれは、垣根帝督  
の補助によって切り付けた男性の血液でした。



気付くと13577号<sup>自</sup>は研究所で指定された自分の個室にある、シャワーを浴びた後に着替えて硬いベッドに倒れ込んでいました。今の時間は夜の八時前で、既に夜と言ってもいい時間帯でした。

昨日と同様に一方通行<sup>アクセラレータ</sup>が住んでいるマンションへ行こうと立ち上がり、外出用の衣服に着替えている最中、不意に両手が赤っぽいように見えました。いつもより何だか赤みが増しているような気がして、こびり付いた血液を流す為にも両手を洗面台で洗いました。

けれど、洗っても洗っても心なしか残る鉄分のような臭いと赤っぽさは取れないまま、13577号<sup>自</sup>は十回以上洗面台で両手を洗っていました。

「…疲れ、でしょうか」

明かに両手から血液は取れている筈なのに、目の錯覚のように赤っぽい両手を疲れているからと思いついて逃げました。幸いいつも一方通行<sup>アクセラレータ</sup>のマンションに行っている時間帯までは時間があつたので、少し仮眠と取ろうと硬いベッドに身体を横たわらせて両目を閉じました。

「よく見ろ新人、首の真ん中から左右3cmまでのこの…  
張ってる筋に紛れて拍動があるのが外頸動脈だ」

声が、聞こえました。

あの時、垣根帝督が話していた内容が再度再生されるように聞こえていました。

「んで、この動脈は脳みそと繋がってんだ。だから、こうやって圧迫すると…」

その声と共に13577号<sup>自</sup>の呼吸が苦しくなりました。まるで誰かに首を圧迫されている訳がないのに、あまりにも現実的なその感覚で本当に呼吸が苦しくて堪らなくて、全身が酸素を求めて鼻や口から呼吸をしようとして

「っは…!!…っは…っは…っは…はあ」

どうにか苦しい悪夢から目覚めた13577号<sup>自</sup>の身体は汗でベトベトでした。

正直…かなり精神的に弱っていましたが、もう一度シャワーを浴びて着替えを着て、一方通行<sup>アクセラレータ</sup>の住んでいるマンション<sup>アクセラレータ</sup>に向かいました。少しだけ駆け足で辿り着いたマンションにはまだ一方通行<sup>アクセラレータ</sup>は帰ってきていませんでした。

いつものように一方通行アクセラレータを待っている間、お風呂上がりののすぐ後だったこともあり、湯冷めで身体がだんだんと冷えてきていました。一方通行アクセラレータが住んでいる部屋の扉の前で体育座りになって、両手で身体を包むようにしてじっとしていました。

「…羨ましい、なあ」

無意識に口から出て行つた言葉をキツカケに、目からポタポタと涙がこぼれ落ちて頬を濡らしました。初めて人間を殺し、13577号分の手を他人の血で染めました。目の前であの男性の命が尽きていく瞬間を見ていました。13577号分の知っている人達もあのように冷たくなつて、動かなくなるのだと思うと両目から涙が流れました。

いつから13577号分も人間として生きて、人間として死ねたらな  
ど思うようになったんでしょう。13577号分の中では人間は自由に生きて、好きなものを好きと言って、どれが嫌なのか言える権利があつて、そのままの言葉を口に出しても許される存在です。

決して一度態度が気に入らなくなつたからと言つて捨てられず、反抗的に生きようと思つただけで罰を受け、自由な意志を持つていることも夢見ることも許されないモノとは違ふんですよね…。

「冷たくても、温かくななくても……許してくれるんでしょうか」

そんな言葉を口に出した時、一番最初に頭に出てきたのはやつぱりあの人でした。唯一13577号分を全否定しなくて、13577号分が人間に対してのこと言つても受け入れてくれました…。ぼんやりと考え事をしていると、マンシヨンの何処かを歩いている足音が聞こえました。

こんな時間帯にこのマンション内を歩く人は、一方通行アクセラレータくらいしかいません。そう思つてこの階の階段方面を横目で眺めました。白くぼやけている何かが階段の方から移動してきて、だいぶ近くなつた辺りで13577号分に声をかけてきたことで、13577号分はその白く

ぼんやりとした塊めがけて抱き着きました。

戸惑っていたのか13577号自の両肩に手が置かれましたが、もう少しこのままでいさせて欲しいと言うと、その手は軽く添えるだけになりました。アクセラレータ一方通行の身体に擦り寄るように頬を寄せると、微かに聴覚が一方通行アクセラレータの心臓の音を聞き取りました。

：一方通行アクセラレータ、貴方には：生きて頂かないと困ります。13577号自の名前も貴方の名前も教え合っていないあの時間だけは、13577号自の心が人間であることを許されるんです。人間と流れている血液の色も身体的基礎構造も同じですが、人間として生きることが許されない13577号自でも人間として呼吸が出来る時間をください。

「…ごめんなさい、ビックリしましたよね」

………どうか、13577号自がいなくなった後でも生きていてください。

ここまでの設定&場面整頓（一部本編&原作ネタバレあり）

★ 13577号 / 方向転換<sup>エンコード</sup>

### 【詳細】

この二次創作小説の主人公であり、一方通行のヒロイン的立場。原作では冥土帰しの病院在住の妹達シスターズの一人だが、何故か身体の一部が突然変異アルビノとして造られてしまった。突然変異アルビノとして造られてしまった自身が廃棄されることを防いでくれた布束砥信ぬのたばしのぶに多大なる恩を感じている。

自身の母親のような存在である布束砥信の為に行動をするが、何処かズレたような結果を導き出しがち。原作主人公の一人である上条当麻並みに自己犠牲精神が高い一面があり、実は戦闘訓練中に足が複雑骨折しかけたことを叱られたにも関わらず、治つてすぐにまた怪我をしているので、全く反省しているとは思えない。

本人曰く「出来るだけ早く価値を見出したかったので、仕方なくです」とかなんとか言っている。

### 【容姿】

御坂美琴みさかみことのクローン体ということもあり、容姿はかなり整っている。ただ、長い黒髪や紅色の目はどうしても他の妹達シスターズと並ぶと目立つ。実は妹達シスターズよりも身長が低く、150cm以上だが160cm未満という絶妙な身長なので、妹達シスターズからも幼く見られがち。

紅色の目は突然変異アルビノの性質を一番強く引き継いってしまったようで、あまり視力が良くない。けれど視力が良くないことを言わないので、結構目の前の相手の顔であっても若干ボヤける。素肌を晒して外に長時間いると、夏ではなくても熱中症の症状を引き起こして倒れる可能性がある。

### 【性格】

妹達の口調である「〜と、ミサカは〜です」というような口調を表面上使うが、実は言わずとも会話できる。一人称は“ミサカ”ではなく、基本的に“自分”と言うので、たまに文章を入力しづらい時がある。

他の妹達と違い、一時期学習装置を取り外されていた時期があったことで、僅かにある感情表現の方法を学べなかった。そのせいか、異性同性関係なく距離が近かったり遠すぎたりするが、本人に悪気はないので被害に合っても何も言えない。

たまに思考回路が機械で出来てるんじゃないかと言うほどの無情さを見せる。喜怒哀楽も同様に顔に出にくく、恋愛を現在進行形で色々と誤解しているので、一方通行が本編でツツコミ役になるのは大体コイツのせい。

御坂美琴や妹達は容姿が似ていることもあり、助けられるところは助けようとするが、布束砥信の方が優先度が高いので一方通行の絶対能力進化計画から逃げたいとは思うが、なんだかんだで止めようとはしていない。やべえコイツ。

最近は表情筋を手懐けたのか、人並みに笑ったり悲しんだり怒ったりと表情を表せるようになった。しかし、基本良い方面にその技術を使ったことは少なく、本編を注意深く見ているとただただ腹黒いだけになる。あくまでも目的の最短ルートを目指し過ぎて、かなり他人からしたらやばい人に見えるだけなので、生暖かい目で見守って欲しいところである。

## 【能力】

他の妹達のように御坂美琴と同等の運動神経を持っていて、同様に流石に超能力は引き継げなかったが、自力で欠陥電気能力的にはオリジナルの1%にも満たない程度、実力は2万人集まってもオリジナルに敵わない程度の性能を上昇させた。欠陥電気は本来レベル2〜レベル3程度の超能力なので、実は凄く努力をしている証拠でもある。

欠陥電気の性質は個体差らしく、13577号の場合その個体差に

よるものの中に“電磁加速”が該当していただけなので、御坂美琴の超電磁砲主にゲームセンターのコインに電磁加速を加えて放つ技で毎分八発、音速の三倍以上の速さ（つまりマツハ3以上）。空気との摩擦熱で弾が溶けてしまうため射程は50mと短めだが、威力や撃ち出す質量を加減すれば射程を延ばすことも可能程の安全性は兼ね備えていない。実質、電磁加速を付与させた身体部位の神経と筋肉に測り切れない程の負荷と負担がかかる為、ハイリスクハイリターンの超能力でもある。

簡単にまとめるなら、超能力を使う度に身体に電気が走っているの  
で、総合的に見ても諸刃の剣でしかない。

### 【一言コメント】

とりあえず、いつか親離れしよう。

あと、将来的に自己紹介をちゃんと一方通行アクセラレータにしてあげて。

### ★ 一方通行アクセラレータ

#### 【詳細】

皆さんご存知かどうかは分からないが、原作主人公の一人であるレベル5の超能力者なのは変わらない。ただ、打ち止めと会う前に方向転換に出会ってしまったことから、妙な接点を持たれてしまったヒーロー的立場の人。

原作での本名は明かされていないことから、本編でも氏名共に伏字表記のような状態。

原作には存在しない設定として、幼い頃に周囲の子供から超能力のみを注視されたことで、本当に周囲の人間が自分自身を見てくれているのか不安になったり、その後何処からか恨みを買ってしまったように電撃使いの女学生から攻撃を受け、結果的に両親を守り切れなかった……というクツツソ重めな過去があります。

両親を失った辺りから一方通行アクセラレータと名乗るようになり、保護者のいな

チャイルドエラ  
い置き去りとほとんど同じような形で沢山の研究所を飛び回る。両親を殺害した電撃使いエレクトロマスターの女学生を返り討ちにしてから、人を殺害したという世間一般から見れば悪人としか言えない行為をしてしまったという思いからか、悪役ヒールというものにある程度執着するようになった。

研究所の外で暮らすようになってから、食生活が崩れたり昼夜逆転は当たり前。自炊はできないので、基本は外食か惣菜などを買って食べる。自身の興味を引かないものに対しては結構無頓着なところがあるのか、家の中はかなり殺風景。

### 【容姿】

原作と対した差はないが、最近は口うるさく注意してくる相手がいるので、少し肌の血色が良くなった気がする。「日焼けを気にしてください」と言われて、日焼け止めをとりあえずと渡されたが、そもそも日焼けする程の紫外線は遮断されていると言えないまま日焼け止めを持っている。

### 【性格】

原作よりも動揺しがちな時があり、大きく違う点としては本気で激怒すると静かに圧で怒りを発するので怖い。方向転換をよく通る路地で見かけてから、一定の興味を持っていたが、まさかお礼と言って家まで来るのは流石に普通のヤツではないと気付いてはいる。

危害を加えてくる訳でもなく、自身から遺伝子情報を奪いに来たにしては方向転換が平和過ぎるので、結局は方向転換の掌で転がされている。けれどもし、方向転換が自身に攻撃をしてきたら容赦なく殺害するくらいのことは出来る。……引き換えに反撃した本人のメンタルが傷付くが。

一週回ってかなり無防備だったり無知だったりする方向転換に対して、十中八九敵に近い存在と分かっているも色々心配しがち。代わりに、敵でなかったら方向転換はかなり心を許されている存在……というよりは、牙を剥かれても大した相手ではないと思っている。



方向転換の距離感バグの第一被害者で、方向転換が訪れる度に色々な意味でドキドキしている。方向転換に対する感情が、どういふものなのかはまだ本人も把握できていないので、基本は戸惑ったり動揺するだけ。

### 【能力】

逆に変更点がある方がおかしい。

### 【一言コメント】

クツツソ重めな過去付け足してすみません。  
せめてカフエインで死ぬことはやめてください。

★ ぬのたぼしのぶ  
布束砥信

### 【詳細】

原作のとある魔術の禁書目録ではほとんど出番がなく、主にとある科学の超電磁砲での登場が多く、御坂美琴と直接出会ったことがある研究者だった女性。以前は一方通行の絶対能力進化計画の中核にいた人物の一人だが、妹達を淡々と製造していた時に方向転換…異常個体と出会う。

異常個体である13577号にまだ利用価値があると思い、破棄を阻止したが他の研究者からの不平不満を言われるようになった。のちに13577号が妹達としての意志ではなく、個としての意志しかないことに気付いた。

妹達としては異常個体である13577号に、新たな利用価値があることが判明するころには13577号に対して情を抱くようになってしまったことで、絶対能力進化計画を進めることに意義を見出せなくなった。

流石に他の研究者からも勘付かれていたのか、13577号の知らぬ間に別の研究所へ移動することになってしまった。

本編ではまだ語られていないことだが、現在の本編時系列の少し後に原作のとある科学の超電磁砲<sup>レベルガン</sup>では、御坂美琴と遭遇したことで妹達の存在を御坂美琴が知るキツカケでもある。

アニメではジト目のダウナー系のように描写されており、私服はゴスロリ系が多い。その影響か、方向転換<sup>エンコード</sup>に対して一時期ゴスロリを着せていたので、方向転換の私服はゴスロリっぽい服か黒い服装が多い。原作小説ではアニメとは違う描写がされているので、時間がある方は是非調べてみてはどうでしょうか。

★ 20001号 / 打ち止め<sup>ラストオーダー</sup>

【詳細】

原作では一方通行にロリコン説が生まれてしまう程の幼女<sup>レベル6シフト</sup>。絶対能力進化計画の関連で誕生した妹達の一人だが、方向転換<sup>エンコード</sup>などよりも上位個体として誕生したので、妹達に対する信号を送信する際は打ち止めに介さねばならない。

本編では未登場の一人だが、方向転換以外の妹達からミサカネットワークを通じて、一方的にはあるが方向転換のことを知っている。方向転換と同じように一方通行に接触しようかと迷っている。

原作と違い、本編では方向転換と一方通行の関係をニヤニヤしながら見ているので、一方通行へは親愛のみかと思われる。恋愛や感情面に関しては方向転換がかなり純粋なので、よく方向転換に対して可愛らしいイジワルをする。

★ 垣根帝督<sup>かきねていとく</sup>

【詳細】

原作では一方通行にこそ勝てないが、学園都市で第二位の能力者。学園の暗部部隊“スクール”として密かに活動しており、本編では変装時の方向転換と遭遇した。原作から派生して外伝作品が存在し、そ

の作品内ではまたも一方通行<sup>アクセラレータ</sup>関連で暗躍している。

原作での彼の扱いがかなりファンからイジられており、意外と探せば彼を主人公とした二次創作もある。彼自身の容姿や性格から、原作での登場が遅かったにも関わらずに人気が高い。一方通行<sup>アクセラレータ</sup>程ではないが、彼も若干のロリコン説が浮上中。

実は能力の関係上、方向<sup>エンコード</sup>転換と非常に相性がいい。なので方向<sup>エンコード</sup>転換と彼が戦った場合、彼が圧勝する可能性が高い。しかし、方向<sup>エンコード</sup>転換は一方通行<sup>アクセラレータ</sup>に勝利する可能性があることから、三竦みの関係になっている。方向<sup>エンコード</sup>転換による距離感バグの第二被害者予定。

## 一方通行な行動に心配と興味

八月二十日の夜：今までのようにアイツはやって来て、今までのようにアイツは俺に生活習慣を直せだの食生活の心配を言う。だが、一向として八月十八日のようにアイツが俺に対して、何かを求めることはなかった。

「えーと…？四番の、メールアドレスを再入力…ですね」

「…わざわざ人ン家来てんのに、機種変作業すんじゃないよ」

「ちよつと今、話聞けないです。すみません」

「……………そオかよ」

目の前で機種変したらしい携帯の説明書片手に四苦八苦ししている姿を眺めながら、頭の中では八月十八日の夜を思い出す。翌日の八月十九日の夜にはケロツとしていて、弱々しく湿った雰囲気すら残っていないかった。

言及しようにも、十中八九コイツは俺に何かをする為にいるっぽいから、容易に聞き出せない。コイツとの会話は親しい隣人や友人のよくな雰囲気だが、会話以外を切り取れば結局直接的な繋がりはない。…足が着かないようにか、コイツが俺に弱みを握られても切り捨てられるように…だな。

「…ん？…あれ、電源を長押し…？」

そんな冷めた考えに、心の奥で汚さないように放り投げた何かが震える。それが震えた理由を信じたくなって、目の前で携帯に向き合つて俺から意識が逸れているコイツの作業を邪魔する。テーブルに広げられた携帯の説明書を手に取って、裏表を逆にしてやった。

「……………あの、もしかして説明書イジりました？」

「ギアな」

「…イジったんですね」

目の前のコイツから向けられる呆れが籠った目線から顔を逸らすように、適当なところを見る。

そうやって俺が顔を合わせないようにしていると、目の前のコイツが急にクスクスと笑い出した。それも何となく愛おしそうな笑みで笑うものだから、少しだけ目線が惹き付けられた。

「猫みたいなことしないでください、つい笑っちゃったじゃないですか」

「は？」

猫？俺が？あんなフワッフワのちっこい小動物みたいだって？

「猫って飼い主が構ってくれない時に、飼い主の気を引いている事柄の邪魔をするんです。可愛いですよね」

そう言われた言葉に凶星だと納得しそうになりながら、可愛いと言われたことを認めたくなくて反抗的な言葉が口から出て行く。可愛いって言えば誰でも喜ぶ訳じゃねえんだよアホが。寧ろそんな嬉しそうに笑うオマエの方が世間的に見たら可愛いの対象だろうが!!

「…誰が猫だってエ？もオ一回言ってみろ、喧嘩なら言い値で買ってやる」

「か弱い女の子に足してそんな無体なことをするんですか…!?信じられません…!!」

言葉の悲観さの割には、先程まで続けていた作業の手を一旦止め、わざわざ胸元で両腕をクロスするようにした後、今度は両手を自身の頬に添えている。

なあに可愛こぶってんだコイツ。気色悪い。

「なアに可愛こぶつてんだオマエ。気色悪りイ」

「な!?女の子にそれは禁句ですからね!!」

「じゃアナンでホイホイと、礼をしたいからーって一人暮らしの男の家来たんだよ」

「……………何も言えませんか」

当たり前だ。どう考えても、どう考え直してもコイツが俺に対する礼?の割合が多すぎる。それに普通、夏の日中に倒れてたのを病院まで運んでくれたからって、個人を特定する勢いで家に来てお礼がしたって言うって、相手の生活習慣や食生活に文句言うか?言わねえだろ。

本当にお礼をしに来たとしても、俺の名前をいつまでも聞く気配すらないのは流石におかしい。いや、その前の時点でもかなり怪しかったが、更に怪しいんだよなあ。

「そもそも、自分のような女の子達が可愛い動作や仕草をしている理由のほとんどが、好きになって欲しいからなんですよ。なのでそんな言い方をしていると、貴方は恋人もきつとできませんね」

目の前の女の、まるで可哀想な存在を見るかのような目についてラツとして、机に広がっていた携帯の説明書を顔面に投げつけた。

曜日感覚が危うい俺の為だ、と言って飾られたシンプルなカレンダーは八月二十日の前日である、八月十九日まで黒色のチェックが付けられていた。過ぎたカレンダーの日々が、コイツとこうやって話すようになってから一週間が経とうとしていることを示唆していた。

方向転換しても、変えられない手のひら

『お前の面倒見るのめんどいから、目的地にいる奴らに世話になってろ』

「…これはまた一方的ですね」

昨日の八月二十日に新しく機種変更したばかりの携帯には、ついさつき届いたばかりのショートメールが一通ありました。見た感じは送り先が不明ですが…只今の時間は昼過ぎなので、恐らく一方通行アクセラレーターではないでしょう。一方通行あの人は活動時間が不定期且つ、夜行性気味ですから。

「…木原数多に、機種変更することを知らせていない筈なんですがね」

残った予想は木原数多からの連絡のみでしたが、13577号自分には木原数多あに新しい連絡先を教えた記憶がありません。…流石木原一族と言ったところででしょうか、勝手にやったんでしょうね。何処までもあの一族は、自己中心的で理解ができません。

『エンちゃん！元氣しとるかー？』

『はい、なんとか』

『ごっちはカミヤんが追試に追われとるよ、――』

『…頑張ってください』

暗部としての姿に着替えた後、機種変更する前に青髪ピアスとのショートメールを少し見返して、機種変更した方の新しい携帯から青髪ピアスへショートメールを送りました。一応上条当麻や土御門元春とも連絡を交換していましたが、上条当麻は追試ですし、土御門元春はかなり返信が遅い傾向があるので、一番返信が早めな青髪ピアスに気になっていたことを質問します。

『機種変更しました。エンコードです』

『エンちゃん機種変したんや!』

『はい』

ショートメールを青髪ピアスに送ってから数分もしない内に、送ったショートメールに返信が返ってきました。：昼時ではありませんが、やはり青髪ピアスのメール返信速度は尋常じゃないですね。まだ入院していた時の上条当麻ですら、メールに四分から五分ほど掛かっていましたし…。

『それと聞きたいことがあって、お時間大丈夫ですか?』

『エンちゃんの為なら僕の時間いくらでも!!』

よくよく考えると青髪ピアスもかなり疑問が残るといふか、正直だ  
いぶ不思議な人ですよ。上条当麻と土御門元春の二人して、青髪ピアスの名前を言うことはありませんでした。流石に13577号<sup>目分</sup>も、  
どうして名前を教えてくださいたくないのかなどと、同じようなことをしている  
身で聞けません。

『以前に青髪ピアスさんが使っていた…あの、記号…?は何ですか?』

『^|^↑このことか?』

『それです』

仕方ないと言われれば仕方ないのですが、やはり文字の羅列や文章のみだと何処か淡々とし過ぎていているように見えて、もう少し感情表現が伝わりやすい方法を探していました。そんな時に青髪ピアスが送ってきたショートメールにあった記号を見て、これだと思ったのを聞き忘れていたんです。

『そーいやエンちゃん携帯とか機械系苦手やったっけ?』

『機種変する前のやつで結構誤字つとつたし』



やはりものの数分もしないうちに返って来たショートメールに、携帯に表示された文字を入力する手が一時停止されたかのように止まりました。

以前、<sup>レディオノイズ</sup>欠陥電気能力的にはオリジナルの1%にも満たない程度、実力は2万人集まってもオリジナルに敵わない程度のレベル上昇によって13577号<sup>自</sup>は妹達特有の<sup>システムズ</sup>情報共有能力である、“ミサカネットワーク”の使用が不可能になりました。基本的に“ミサカネットワーク”は妹達<sup>システムズ</sup>が微弱に発している電磁波によって成り立っています。

なので<sup>レディオノイズ</sup>欠陥電気のレベルを上げ、何故か微弱な電磁波を発せなくなった13577号<sup>自</sup>は、出来たとしても上位個体からの一方的なメツセージくらいしか利用できなくなっているのです。

そして最近判明したことです<sup>レディオノイズ</sup>が、欠陥電気を使用することで身体的負荷と体温の低下、最後に周囲の電気を体内に蓄電するということでした。まとめると、<sup>レディオノイズ</sup>欠陥電気は13577号<sup>自</sup>の体温を電気として変換するか、周囲の電気を13577号<sup>自</sup>の身体に蓄電したのちに放出するようでした。

つまり、電子機器とあり得ないくらいに相性が悪いということですから。流石に機器を動かしている電気全てを奪うことは出来ませんが、全体の二割か三割程度は奪っているのです、当然機器の動作は遅れたりおかしくなったりします。それをどうやって青髪ピアスに説明するのか、それとも偶然だと誤魔化すのか迷いました。

『まあ…恥ずかしながらそうですね』

『へえー意外やわー』

『エンちゃん何となく器用そうやし、機械系得意やと思つとつた』

『期待に添えずいません、；；』

『お！そうそうそんな感じや！』

最後のショートメールが届いた後に携帯を閉じようとして、踏み留

まってもう一度携帯を起動させました。いくつか並んでいる連絡先の中から、昨日登録したばかりの相手にショートメールを送信しました。

「……あー、あー、…よし、じゅんび、ばつちり…です」

木原数多に指示された目的地は、学園都市の中心部からかなり離れた廢ビルの一角でした。13577号<sup>分</sup>が目的地に到着する時には、既に廢ビル内に五人前後の気配が存在していました。

普通にビル内の階段を使って人の気配が集まっている階に入っただけに、その階層に居たであろう男の一人が13577号<sup>分</sup>の方に向かって叫び、逃げるかのように走ってきました。

ただ、実際には男の手にはスタンガンが握られていて、叫んでいる内容から13577号<sup>分</sup>を連れてくるように誰かから命令されたようでした。

男の後ろに見える数人の人影を見るに、男はかなり急に行動をとったんでしょう。それに助けに入るような雰囲気がないので、恐らくこれは木原数多が余計なお世話をやいた結果なのでしょうね。

男が何やら喚きながら接近し、ついに13577号<sup>分</sup>の目の前にスタ

ンガンに向けた瞬間に、直接スタンガンに触れてスタンガンから電気を奪います。直接スタンガンの電気を奪った左手が痛む中、今度は13577号<sup>自分</sup>の行動に茫然としている男自身に触れ、無理やり男の体温を限界まで上昇させます。

電磁波を上手く操って男の体内で過度の熱放射を起こさせた結果、男は触れた直後にビルの床に倒れ込んで動かなくなりました。その両目は既に瞳孔が開きかけていて、急な体温の上昇でさまざまな細胞が死んでいるのか、口は半開きで閉じることはありません。

…この方法であれば生死の主導権をこちらが握れるので、震えは出てくることはありませんでした。足元で死んでいた男を避けて、奥に立ち並んでいる数人の集まりに向かって移動しました。

「こん、にちわ、かきね、てい、とく」

「…よう。驚いたぜ、前は人一人殺すのに躊躇したとは思えねえ成長だな」

「あれくらい、できま、す」

「まあいい、木原数多から話は聞いてンだよな？」

「……はい」

「お前は今日から俺たち暗部組織が一つ、“スクール”の仮隊員だ」

『こんにちわ、お昼頃は不在か寝ていると言っていたところすみませ  
ん』

『しばらく忙しくなるので、直接会うのは三日くらい先になりそうで  
す』

『三日会えない間で：室内の状況が荒れていたり、食生活がガラツと  
変わっていたら許しませんからね（〇―〇）』

## 方向転換して眺める先の能力者

八月二十一日の夜、13577号<sup>自</sup>に残った“ミサカネットワーク”の繋がりに越しに、上位個体のかなり強い指示が来ました。

どうやら今夜行われていた一方通行<sup>アクセラレータ</sup>の絶対能力進化計画<sup>レベル6シフト</sup>の実験場に、一般人が侵入してしまったと10032号から連絡があり、現在地が一番近い13577号<sup>自</sup>に指示が入ったようです。

13577号<sup>自</sup>から返信を送れない不便を少し不満に思いながら、13577号<sup>分</sup>は欠陥電気能力的にはオリジナルの1%にも満たない程度、実力は2万人集まってもオリジナルに敵わない程度を使ってコンテナで溢れた現場に向かいます。瞬間、両足が痺れるかのような触覚に包まれて、足先の痛覚が不確かになりました。

コンテナに囲まれた現場の一角に、御坂美琴<sup>オリジナル</sup>の姿が見えて足を止めました。

御坂美琴<sup>オリジナル</sup>を一般人として連絡が来ているのはおかしいですね。それならば以前にも御坂美琴<sup>オリジナル</sup>は実験場に侵入し、一方通行<sup>アクセラレータ</sup>と接触しています。10032号<sup>アクセラレータ</sup>が一方通行と一般人が接触しているかのような連絡の仕方だったので、恐らく今回の実験に10032号が同行するところに御坂美琴<sup>オリジナル</sup>以外の一般人が侵入した…ということでしょうか。

ならば御坂美琴<sup>オリジナル</sup>が実験の妨害をしたように、御坂美琴<sup>オリジナル</sup>の意見に賛同する何者かの可能性が高いですね。ですが御坂美琴<sup>オリジナル</sup>の性格的に同級生を同行させるとは思い難いですし…、だからと言って自身以外のレベル5に該当している誰かを連れて来れることはないでしょう。

以前は御坂美琴<sup>オリジナル</sup>一人だったことから、御坂美琴<sup>オリジナル</sup>の身の回りの存在で御坂美琴<sup>オリジナル</sup>の意見に同調できる人物…例の御坂美琴<sup>オリジナル</sup>の後輩御坂美琴<sup>オリジナル</sup>の後輩兼風紀委員である白井黒子<sup>しらいくろこ</sup>のことではないですよね…？

「オイオイ頼むぜ…一般人なンざ実験場に連れ込んてンじやねエよ」

聞き慣れた一方通行アクセラレータの声に気付いて、声のする方角へ向かうと一方通行の前に横たわる10032号の姿と、ただならぬ覚悟を含んだ目でその背を睨む上条当麻の姿がありました。十中八九一般人として一方通行アクセラレータに文句を言われている原因は上条当麻のせいでしょう。

「クソ、後味悪いなア。秘密を知った一般人の口は封じるとかお決まりの展開かア？」

一体何処で上条当麻と御坂美琴オリジナルが遭遇したかは不明ですが、上条当麻の性格を含めて考えればあり得ない行動ではありませぬ。土御門元春や青髪ピアスも同様に覚悟を決めてしまえば、上条当麻のようになるのでしょうか。

「…うるせえよ」

しかし、大きな問題点としては上条当麻が学園都市に来た理由です。本来この情報は13577号自分が詳しく知ることが禁止行為タブーに該当しますが、知ってしまった以上13577号自分に出来ることは知らないフリのみです。

「あ？」

「グチャグチャ言っていないで離れろつつつてんだろ…、三下あ!!」  
「…オマエ、何様？7人しかいねエレベル5の超能力者の中でも、頂点って呼ばれてるこの俺に向かつて、“三下”ア？」

ここは学園都市です。学園都市では科学的に開発した異能力を思春期の心性と薬物作用を網羅した方式で、その異能力を子供に施します。ミクロな宇宙での観測で生じた歪みが、マクロな宇宙に超自然現象を引き起こす…という量子論を基に発展させた方式は一方通行アクセラレータ

同じです。

予備動作がほとんどない状態で一方通行は足元の小石を上条当麻に向かつて蹴り飛ばし、上条当麻の頬すれすれを掠めて小石は上条当麻の立っている斜め上にあつた建物を破壊しました。

対して上条当麻はその威圧とも言える行動に怯まずにいます。このように一方通行には一つ一つの動作に対して働くエネルギーの方向を操り、掛け合わせて総合的な威力を変質させる超能力が目覚めました。

恐らくそれ以外にも一方通行の超能力で出来ることは多いと言われていますが、上には上という存在がやはりありました。

「…へエ、オマエおもしれエなア」

それは“原石”と呼ばれる超能力者です。

彼らは科学的な能力開発も、幾何学的な簡単に言うところ自然の力では絶対に作れない人工的なもの”のこと。もしくはは魔法的なもの、超常現象能力開発も受けていない身でありながら超能力以上の異能を持つことが特徴です。恐らく上条当麻の持つ特異性とは関与していないと思われませんが、あくまでも一方通行は学園都市の中では強い部類だということです。

「何を……何をやっているのですかと、ミサカは問いかけます」

10032号が一方通行に向かつて歩き始めた上条当麻に対して疑問を投げます。灰色にも見える10032号の両眼は大きく見開いていて、目の前の光景にどれだけ驚いているのか分かります。

「…ミサカは自分の心理状態に疑問を抱きます」

……心とは恐ろしいものです。

13577号には一方通行と上条当麻が今まさに争い合うのを阻止

することは許可されていないにも関わらず、心と呼ばれる何かの片隅で“争わないで欲しい”と思っっている部分があります。

けれど“スクール”の仮隊員としての13577号自の声を作り出す変ボイスチェンジャー機を外さないまま、情けなく両手両足は失うことに対する恐怖で震えています。

「いくらでも替えを造れる模造品の為に貴方は何をしようとしているのですかと、ミサカは再三にわたって問いかけます」

……ですが、13577号自には完全なる模造品を造り出すことはできないと信じています。

布東砥信から頭を撫でられて、13577号自が突然変異生物やウイルスがもつ遺伝物質の質的・量的変化した個体でよかったと言ってくれたあの日も、病院で木山春生・上条当麻・土御門元春・青髪ピアスの四人と出会ってたくさんのお話を交わしたことも、一方通行アクセラレータに近づく目的だったとはいえ、忘れられない程に強烈な記憶のままに残る夜ふかした時間も、これから先で思い出になるかもしれない出会いも全て、模造品として替えが造れるなんて信じたくありません。

「ミサカはボタン一つでいくらでも自動生産出来るんです。…造り物の身体に借り物の心、在庫にして9968」

「うるせえよ。ちっせー事情なんて知ったことじゃねえ」

……信じれるというのであれば、13577号自は…人間として生きていたいなど、思うわけがありません。

「俺はお前を助ける為にここに立ってんだよ。…お前は世界でたった一人しかいねえだろうが」

人間が…いえ、人がとても羨ましいです。

13577号自や10032号のように淡々とそこにありながらも、死



ねと言われれば従うだけの存在ではなく、それぞれが違って、それぞれの意見を持っていて、それぞれが傷付けあったり庇いあったりして、それぞれが残酷で優しい言葉を発する彼らが羨ましいです。

「勝手に死ぬんじゃないぞ？…お前にはまだ文句が山ほども残ってんだ」

上条当麻は10032号…いえ、妹達シスターズの一端である個体に対して、地獄の中で待ち望んだ蜘蛛の糸とも言える言葉を続けて言い放ちました。

「…今からお前を助けてやる。お前はそこで黙って見てろ」

勝てる訳が無いと分かっている、その両足で立ち上がれる彼らが羨ましいです。誰かの為に死んでしまうことを恐れない彼らが羨ましいです。恐怖に争いながら生きている彼らが羨ましいです。

「何だア？…さつきからヒーローじみた台詞ペラペラペラ…。まさかこの俺の存在、忘れちゃったんじゃないやねエよなア？」

そう言った一方通行アクセラレータの口角はあくどい笑みを浮かべていて、そんな一方通行アクセラレータに対して上条当麻は己の特異性が籠った右手を強く握って振り上げました。

あと数cmというところまで一方通行アクセラレータはわざと上条当麻の振り翳した拳を待ち構えた瞬間、自身の顔に届く辺りで左足で地面を踏み付けて衝撃の流れを上条当麻に向けました。

一方通行アクセラレータの超能力によつて、本来以上の力の流れをぶつけられた上条当麻の全身は30cm前後浮き上がり、痛々しい声と共に首筋辺りから地面に着地しました。

「…遅つせエなア」

上条当麻の様子を見るに意識こそ失っていませんでしたが、人の身体の構造を考えるとその全身に走る痛みや手足の痺れは凄まじいでしょう。場合によっては息苦しさや吐き気があってもおかしくはありません。首や背中に走る脊髄には重要な神経が多く、その神経を損傷した際の被害は身体機能に大きなハンデをもたらします。

「オマエそんな速度じゃ、百年遅エつつてンだよ!!」

荒げられた一方通行アクセラレータの声と共に踏み付けられた右足によって、コンテナを運ぶ為にある足元のレールが人の手で簡単曲げられる針金のように捻じ曲がり、一方通行アクセラレータは笑いながら曲がりうねるレールを刺激すると、刺激されたレールは先程まで針金のようにだったのに、突然本来の硬さを取り戻して上条当麻の方へ向かって飛んで行きました。

「ほら、ほらア!!」

一方通行アクセラレータは一本、二本と上条当麻に向かってレールを飛ばし、次第に数え切れない程の数のレールが上条当麻の立っている地面に刺さり、それこそ針の筵と言える光景のまま砂埃に覆われていく様を13577号自分は固唾を呑んで見ていました。

「遅っせエなア」

何度も上条当麻へ向かって飛んでいたレールによって舞い上がった砂埃がようやく晴れて、白かったであろうワイシャツが砂で汚れながらも、肩で呼吸を続けている上条当麻の姿がぼんやりと見えました。

「ほら、全然遅エ」

当たり前のことです。いくら上条当麻がこの学園都市で異質な存在だとしても、一方通行アクセラレータのように目に見える程に大きな異質ではないのですから。当然彼の何もかもは年齢に伴ったものばかりで、そこそ足が速いわけでもありません。

「狩人を楽しませるならキツネになれば、喰われる為の豚で止まってんじゃないやねエぞ三下ア!!」

ですが、上条当麻もただ一方的に攻撃されるだけではないでしょう。彼の友人である土御門元春と青髪ピアスは言っていました。上条当麻は誰よりも頑固であり、とても不幸なお人好しなのだと教えてくれました。

「や」と…」

だからきつと…上条当麻という男が何かを自身に定めた時、それを何らかの形で成し遂げるまで諦めることはないでしょう。

一方通行アクセラレータが着地して再度左足で衝撃を生み、その衝撃をフラフラとしながらも両足で立っていた上条当麻に向きました。身体的には限界であろう上条当麻の身体は、いとも簡単に背後にある地面に突き刺さっているレールに背を打ち付けます。

「そろそろ…終わりにするとすつか」

そう言っアクセラレータて一方通行は上条当麻との争いに対する勝利、もしくは自身の敗北がないような雰囲気、目の前に座り込む上条当麻にその右手を伸ばしました。

## 一方通行なレールの終点

パシン、と俺の伸ばした右手が上条<sup>一般</sup>当麻に叩かれる。

「…はア？」

…何で俺の伸ばした手が叩かれた？いつものように反射は俺の意識外や無意識下で接触した物理現象を反射するようにしてる。明かに目の前の上条<sup>一般</sup>当麻の手に叩かれたのは物理現象だ。

…反射しない設定にした覚えはねえ。

メル<sup>ヘン</sup>野郎<sup>ダーク</sup>マター<sup>マター</sup>垣根帝督の未元物質みてえな超能力者なら俺の反射を通り抜ける何かをしてきやがってもおかしくはない……。でもそんな超能力があつたとするなら何故、俺の攻撃から逃げるだけだった？

それに超能力といえど、どんなもんに力の流れ<sup>ベクトル</sup>つつーのはある。

脳が自身の手に対して動く指示を出し、神経がその電気信号を手に伝えることで手が動く。

つまり、脳から神経に対して電気信号を発した時点で、力の流れ<sup>ベクトル</sup>は生まれてる。

俺はその電気信号を四肢に伝える神経に干渉すれば、人すら殺せる。

実際似たようなことを以前の実験でやった。じゃあ何なんだ今のは。

超能力じゃねえにしろ、物理的なもん以外の何だって言うんだ？

上条<sup>コ</sup>当麻<sup>イ</sup>が俺の手を叩くまでの速度<sup>スピード</sup>・威力<sup>パワー</sup>・向き<sup>ベクトル</sup>の何が今までと違う??

超能力者なら能力に伴った現象を引き起こす。

ただだけ弱え能力が発動していたとしても別に目に見えるもんでなかったし、赤外線や紫外線といった不可視光線のように人の視界<sup>目</sup>に映らないもんでも発見自体が初の能力者じゃない限り反射自体は成功してる筈だ。

日常的に精神感応<sup>テレパス</sup>とかを送られて反射<sup>フィルター</sup>の設定外にしたとかではな

いし、そもそも精神感応テレパスだけの超能力チャ者が俺の前にのこのこと出てくる訳がねえ。

反射イレギュラーに異常がが生じた可能性はあるが、生じたところで反射される事実は覆せねえ。

俺が反射を意図的に変えるのはそうそうねえし、確かに騒音とかの観測したことがねえもんとかは反射出来ない。

でもやっぱ反射自体の機能は働いてることに変わりはねえ。俺だって反射を通り抜けた観測外の現象の感知はするし、だから観測外の現象を反射する設定フィルターに変更できる。

反射が機能してれば……いや、待て。

仮に反射の感知機能から逃れられる能力が現象があったら……う？

とりあえず空間移動系テレポルトの超能力ではないな、上条当麻コイツがそんな動けるとは思えねえし、まあ動いたら俺も分かる。

そうなる空間に干渉する類で発動条件がある超能力くらいしか……いや、でも、反射に感知されない要素がねえ。

それか反射自体が何らかの現象によって阻害された……いや、それだったら俺も反射が阻害されたっつーことが分かる。

「……」

……観測外……いや、まさか、そんな、……。

どこ見ても科学で溢れた東京西部にある完全独立教育研究機関。あらゆる教育機関・研究機関の集合体、学生が人口の八割、外部より数十年進んだ最先端科学技術が研究・運用されている科学の街の総本山なんだぞ……!??

そんなところに魔術側の能力者がいる可能性があんのかよ!!!

瞬間、俺の脳裏に過去の記憶がよぎった。

「ねえ——、もしスゴい力が使えるようになるって聞いたら」

「ほしいにきまつてる!!!」

「そんでそんで！おれがふたりをまもってあげるんだ!!」

「…だよなあ、お前ならそう言うとお父さんも思ってたよ」

ああ、なんで……。

「———すごい!!うわあ!!ほんとにてがとどかないよ!!」

「ぼくも———みたいなのがほしかったなあ」

「…でもどっちぼーる、ひまになる」

「どっちぼーるくらいどーでもいーじゃん!」

なんでそこまで俺の邪魔をを止めようとするんだ!!!!

「おつきくなったなあー———!!」

俺は結果がどうであれ人を殺守れなかったしたんだ!!!!

「…重たい」

だから名前別人として生きてを捨てたんだ!!!!

「あら、いいじゃない。せつかくだから三人で写真撮りましょう?」

だから異能一方通行になったんだ!!!

「…何で今日誕生日の俺が譲歩するんだよ。撮らせるもんか」

…俺は誰一人も守れないまま、人殺しをした悪党なんだ。

俺の超能力が狙われるなら、俺が最強になって、俺が堕ちるところまで堕ちれば…もう、あんなことは起きないよな?」

それに、最初からそうだったように振る舞えば、誰も俺を狙うなんて馬鹿をやらかさないだろ?」

過去の記憶と、どう表現したらいいのかわかんねえ感情が入り混じるように俺の内側で暴れて、目の前の上条当麻一般人から離れる選択肢を取ろうとする頭と反発し合う。

あの時のように地面を踏み付けて、その衝撃の威力を掛け合わせて放つだけ。

「~~~~ああアア!!!」

暴れ回りような感情に任せた威力のまま、周囲のコンテナを全て壊さない程度の範囲に放たれた衝撃は、目の前のもはや上条当麻一般人と言えない存在をコンテナの鉄製の壁に打ち付けた。

続けざまに上条当麻一般人が苦しそうに背を打ち付けて、身体を預けているコンテナに向かって飛び蹴りをかます。

辛うじて俺の飛び蹴りを直撃せずに済んだ上条当麻一般人の背後、大きく窪んだコンテナのバランスが崩れてその上に積まれていたコンテナが重力に従って上条当麻一般人を下敷きにしようと落ちた。

コンテナ程の質量が落下した勢いで、落下したコンテナや俺が飛び

蹴りをかましたコンテナの中身が周囲の僅かにある風に巻き込まれながら舞い上がる。追い打ちをかけるように他のコンテナも壊して中身の粉が舞う範囲を広げる。

「中身は小麦粉でしたってなア」

これで下準備は出来た。勘のいいヤツなら気付かれるが、目の前のボツロボロの上条<sup>一般</sup>当麻<sup>人</sup>を見る限り、「気付いてません」って顔に書いてやがる。例え上条<sup>コイツ</sup>当麻<sup>ツ</sup>が魔術的な能力を使うとしても、恐らく対象に接触することで発動することは間違いねえ。

「今日は風もねエし、ひよつとすると危険な状態かも知れねエなア？」

ほとんど風の流れがなく、あつたとしてもコンテナで遮られるこの場所に広がったのは、本来料理などに使用される小麦粉。まあ俺に接近されずに攻撃すればどうにかできるってワケだ。そう考えちまえれば方法はいくらかでもある。俺が能力でイジった衝撃でダメージは通るってことは、フツーに拳銃で数回撃てば簡単に殺せる可能性が高い。

「なんでも空気中に粉末が漂ってて、ソイツに火が付くとさア…」

つまり、あくまでも上条<sup>コイツ</sup>当麻<sup>ツ</sup>の能力効果が及ぶのは<sup>超能力</sup>異能<sup>力</sup>のようなものであつて、物理現象に対する対抗力がねえと見た。じゃなかったら俺が曲げたレールからも、己の頭上に落ちてくるコンテナから逃げることは意味がない。まあ上条<sup>コイツ</sup>当麻<sup>ツ</sup>が意図して俺を騙してんなら話は別だが。

「酸素の燃焼速度が馬鹿みてエに早くなるんだと!!」

ほら、何も分かってねえ正義<sup>ヒーロー</sup>の味方<sup>ロウ</sup>に時間を使わせる為の悪党<sup>ヒール</sup>の台



詞ってあんだろ？

さあ、ご丁寧に説明してやんだから足止めて時間を消費しやがれ。その後に、頭ん中お花畑な正義の味方の顔が焦りで歪んでいくんだ。

「なア、オマエ」粉塵爆発」って言葉ぐれエ聞いたことあるよなア？」

そこまで説明すると、理解出来たらしい上条当麻の顔が焦りと恐ろしいものを見たかのように歪んだ。ドタバタと情けなく地面を蹴つて逃げていく背に、ジワジワと口角が上がって、掠れる声で笑う。今逃げたところで、爆発から逃れられないのは確実だ。

瞬間、周囲に舞った小麦粉に摩擦によって起きた火種が広がる。空气中の酸素が急激な爆発時の炎によって奪われて、酸欠独特の眩暈にクラリと酔う。俺は反射の設定上に炎や死に至るような熱源は遮断するようになっているから、強いて酸素が僅かに薄くなるくらいで済む。

「全く…さっき身を持って経験したばっかじゃねエか？」

黒煙を反射の設定で遮断するように変更した直後、黒煙が爆発していない場所から流れこむ酸素によって段々と不明瞭ではなくなっていく視界に上条当麻の姿が見えて、少し鬱陶しくなる。

「酸素を奪われるとこっちも辛いんだっつーの…あア死ぬかと思っ  
た」

上条当麻「ただここに居座るつもりなんだ？」

…ああ、そういや」助ける」とか正義の味方じみたことぐだぐだと言ってやがったなあ。

「喜べ。オマエひよっとして世界初じゃねエのか。この俺を死ぬかも

しれねエとこまで追い詰めるだなんてさア」

空気中の酸素の流れから、目の前でぶっ倒れてる上条当麻<sup>相</sup>が息絶えてないことが分かる。

良かったなあ、ゴキブリ並みの生存力あって。あの爆発の中で四肢の一部すら欠損してないなんて運に恵まれてるぜ？

「死に物狂いで努力しても一步も近付けない。かといって、仮に近付いたところでオマエに何が出来るってんだ？」

そもそも近付けねえと思うがな。

「俺は触れたものの全てのベクトルを操ることが出来る。俺がオマエに触れたら最後、全身の血管と内臓を根こそぎ爆破、ってことなただけど？そこんとこ正しく理解してたのかア？」

実際俺の異能<sup>超能力</sup>は大半の攻撃を無効化、そして反撃を可能にする。まあこの世で俺を殺せるのは寿命くらいじゃねえの？力の流れ<sup>ベクトル</sup>が存在するもの全て俺には届かないし、届くわけねえ。

「つつても…この一方通行<sup>アクセラレータ</sup>を前に、今こオして呼吸してることもそのものが奇跡なだけだなア…それ以上を望む、ってのは贅沢じゃねエの？」

物理的に触れないもの、または触ったところで意味がねえもの以外は俺の支配下だ。それこそ人が自然に行っている、食いもんを食べて消化して、身体を動かす為のエネルギーを得る為に酸素を吸うことから俺が出来ないようにだって出来る

「だから良い加減、楽になれ!!」

そう言つて俺はコンクリートの地面を蹴つて向かつて行つた。目の前の上条当麻<sup>相手</sup>に、トドメを刺す為に。俺は確かに右腕を伸ばして上条当麻<sup>コイ</sup>を殺そうとした。

「つくそお!!!」

顎の下が痛い。なんで。どうして、俺に手が届く。アツパーされた？この俺が？なんだ上条当麻<sup>コイ</sup>。なんなんだよ上条当麻<sup>コイ</sup>は!!!!

「ツク…!!面白れエ…畜生…!!イイぜエ、最高にイイねエ。愉快に素敵に決まっちゃまったぞ」

いや、偶然俺にアツパーが入つただけだ。きっとそうだ。じゃねえならなんだ。ビギナーズラックつてヤツか？

「ツオマエはア!!!」

上条当麻<sup>コイ</sup>が俺に攻撃を当てられたのは偶然だと思い、再度力の向き<sup>ベクトル</sup>をイジつて加速して触ろうとした。けれど今度は左頬を殴られた。確かに俺に攻撃を当てたんだ。それも一回や二回じゃねえ。覚えのない骨の痛みや皮膚の下の神経に熱を持って染み渡るような痛みが殴られた箇所<sup>コイ</sup>に広がる。どれだけ殴られたのかすらあまりの衝撃だつたもんで頭に入つてねえ。

とにかくこの状態から離脱することを考えまくつて、力の向き<sup>ベクトル</sup>を操作して上条当麻<sup>コイ</sup>の手が届かない高さまで跳躍し、別の場所<sup>ベクトル</sup>に移動し

た。全身が軋むように痛い。マラソン後のような不安定な呼吸を続けながら、口元まで流れてきた汗を手の甲で拭う。

「畜生……どオいうことだア？ 一体……」

「っは、負けたことがない、ねえ？」

俺の耳に届いたその声に、素早く姿勢を低くして警戒体勢をとりながら左足を軸にして背後に振り向いた。背後から聞こえた声の主がコンテナの影から姿を現したのを見て、俺は再度顔を歪めた。

「あらゆる敵を一撃で倒し。どんな攻撃も反射する。そんなヤツが喧嘩のやり方」なんて知ってる筈がねーよな」

「吠えてンじゃねエぞ、三下がア!!」

戯言を口にする上条当麻の言葉に、再度思い知らせてやろうと左足で足元のレールを踏み付け、踏み付けた時の力の向きを使い、この状況を崩させるつもりだった。

「なにっ!!?」

しかし上条当麻は俺が空中にレールを上げて、また針の筵のようにしてやろうと力の向きを上に向けていたレールを、てこの原理のように上手く利用して飛びかかって来やがったんだ。さっきのダメージで足元がフラフラとしていた俺は、上条当麻が落下してくる勢いが足された拳に再度吹き飛ばされた。

「アイツらだつてな…精一杯生きてきたんだぞ…」

顔を何度も思いつ切り殴られたことで頭ん中の脳みそが直接揺さぶられるような感覚と、向こうの攻撃の度にぶつかったりしていた身体の痛みの中、痛みが増すと分かっているにもかかわらず荒い呼吸を続

ける肺と口。

「全力を振り絞って…必死に生きて…精一杯努力してきた人間が…」

そんな割とピンチかもしれないねえ中で俺の耳が聞き取る声は、やっぱり俺が腹立つようなことばっか言ってるやがって、舌打ち出来たらならしたいくらいには俺の中で虫酸が走っていた。

俺が上条当麻コイマツに吹き飛ばされた先がレールの終点行き止まりじゃなかったら、まだ。

「なんだっててめーみたいな人間の食い物にされなくちやなんねーんだよ…!?!」

垣根帝督メルヘン野郎が目付きが悪いと言っていた両目で、眼球の筋肉が許す限り上条当麻アイトマツを睨んだ。上条当麻コイマツが言い放つ甘い考え現実を見ないに浸り切った言葉葉を鼻で笑って口を動かした。

「精一杯生きてきた」？「全力を振り絞って生きてきた」ア?」

ああ、確かに人道的には正しいことだろうなあ。

「…なんだよそりゃあ?」

そんなんじや、学園都市は生きていけねんだよ。

大きく口で息を吸う。目の前の上条<sup>コイ</sup>当麻<sup>イッ</sup>にこれを使わないといけねえ状態まで追い詰められたこと事態は腹立たしいが、だからと言って手を抜けばこつちが殴られるだけだ。

「くか…くかき、くかきけこかかきくけききこかかきくこくけけけこきくかくけけこかくけきかこけききくくききかきくこくけけかきくこけくけくきくきくきこきかかか——!!」

俺が吸おうとした空気の流れ<sup>ベクトル</sup>を操って、周囲の空気を圧縮する。全演算機能をこの辺りの空気の流れ<sup>ベクトル</sup>の操作と圧縮に回す。俺の周囲の空気を中心に気圧の高い空気を近辺の建物から集める。風向きは低気圧が上へ、高気圧が下へ流れることを利用すれば、ちよつとした空気弾を作れる。

低気圧自体が上空に上がって高気圧に変わる時点で、ある程度の圧縮はされている。ただそれだけじゃ人一人ぶつ飛ばす威力も出ねえ。簡単に言っても台風が出来る原理と大して差がある訳でもねえんだ。海水温が高く日差しが強い熱帯の海上などで発生した水蒸気は上空に上昇し、そんな時に出来る上昇気流が上空で冷やされることによつて多くの雲を形成する。

形成された雲は次第に渦を作り出し、出来た渦の中心付近の気圧が下がる。そつから先は渦自体がでつかく発達して風速が一定を超えれば“台風”に、台風に定義されるまでの大きさを保てないまま大気に消える時もある。

んで俺が利用したいのはそれに近い作用だ。あくまでも擬似再現だから台風が出来る訳じゃねえが、無理矢理流れ<sup>ベクトル</sup>を操ればそれに近い現象は出来る。その分逆算して再現するまでが苦しいところだが、やらねえ理由もない。

「殺せ」

いい感じに圧縮の調整が整った空気の塊を、目の前に突っ立ってる上条<sup>相</sup>当麻<sup>手</sup>に向かって放つ。それこそまるでファンタジー世界で使われる魔法のように圧縮された空気が放射線状に飛んで、俺が演算上に組み込んだ上条<sup>標</sup>当麻<sup>的</sup>付近を掠めて2〜3 m程向こうに吹き飛ばした。

「なんだ？なんだよう？なんですかアその様は？」

容易に吹き飛ばされていったその姿を馬鹿にしたように笑ってる。

実際先程まで俺を殴りまくって追い詰めたとは思えない情けなさに、内心で呆れと落胆に近い何かが出てきたのを押しさえ付ける。

「結局デカイ口叩くだけで大したことねエなア。おら、もオ一発かましてやるから、カツコよく敗者復活してみろっての!!」

足元のレールに仰向けで倒れ込んだまま起き上がらない上条<sup>ア</sup>当麻<sup>イツ</sup>を笑いながら、再度周囲の空気を操って圧縮をし始める。一度逆算と演算処理を通過した計算式だということもあって、一度目のように言語機能の低下を伴わなくて済んだ。

「圧縮…圧縮、空気を圧縮」

順調に俺の頭上に圧縮と収縮を繰り返している空気の塊の調整を絶えず続ける。やはり圧縮し過ぎていることで高気圧になっている塊が多い。別に俺としてはこのままかましたっていいんだが、少し勿体無い気がして考える。

「圧縮…イイぜ、愉快なこと思い出したア！」

俺の脳裏によぎったのはいつもこの実験場で殺<sup>壊</sup>してきた妹達<sup>シスターズ</sup>が使う欠陥電気能力的にはオリジナルの1%にも満たない程度、実力は2万人集まってもオリジナルに敵わない程度のこと。閃いた考えを再現出来るか逆算して、可能であることを証明出来たことに純粋な好奇心が湧き上がる。

「おら、さっきまでの威勢の良さはどオしたんだ!!? オマエにはまだまだ付き合っつて貰わなきゃ割に合わねエンだっつーの!!」

頭上で計算上に組み込まれた圧縮を繰り返された空気の塊同士を近付けて、粘性摩擦空気などの気体同士の僅かな粘性によって、移動するときにまわりの空気との間で摩擦が発生する現象の起こりさせてプラズマ気体に熱や電気エネルギーを加え、気体の分子が解離して原子になり、さらに温度が上昇し原子核のまわりを回っていた電子が原子から離れ、(この現象を「電離」といいます)中性分子とプラスイオン、マイナスイオンが混在して非常に活性化した状態のことが出来る温度までその作業を繰り返して熱エネルギーを増やす。最低でも蛍光灯の中で起こっているプラズマ状態と同じ10,000度は届かないといけねえな。

「アクセラレータ  
二方通行!!」

そんなことを考えていると、俺の超能力名<sup>今の名前</sup>が呼ばれた。それも最近聞いたばかりの御坂美琴<sup>第三位</sup>の声だ。声がした右斜め後ろを目線だけ向ける。当然俺の頭上で繰り返される計算上の現象は止めない。

「……動かないで」

「……めろ」

微かに起き上がり始めた上条当麻<sup>ツイン</sup>の姿に少し関心を持ちながら、俺自身はプラズマを形成することに集中を向ける。てかさり気なく



他人一人挟んで会話すんじゃないよ。

「やめろ…御坂…」

「ごめん…アンタは何一つ失うことなく、みんなで笑って、みんなで帰ることを願ってた。…だけどそれは無理」

一体何があって御坂美琴と上条当麻が出会ったのか知る訳ねえが、妙に厄介なコンビ組みやがって……。

「だから…ごめん」

だからと言って俺が見逃す訳でも、逃してやる訳でもないがな。

「何だかね、勝手なことかもしれないけどさ…それでも…それでも、私はきつとアンタに生きて欲しいんだと思う」

「やめろ!!」

上条当麻が御坂美琴に大して投げかけた声の終わりと共に、御坂美琴がいる方向から電磁波が集まって超電磁砲主にゲームセンターのコインに電磁加速を加えて放つ技で毎分八発、音速の三倍以上の速さ（つまりマッハ3以上）。空気との摩擦熱で弾が溶けてしまうため射程は50mと短めだが、威力や撃ち出す質量を加減すれば射程を延ばすことも可能を撃とうとしているのが分かる。だがそれを撃つにはちよいと遅かったなあ御坂美琴。

「…プラ、ズマ？」

俺の頭上に出来上がりかけている現象の名前を御坂美琴が愕然とばかりに呟く。

「風の向きを操り、一箇所に集めて、プラズマを形成するなんて…!」

その驚く声に入り混じる恐怖に近い感情に俺はつい、笑いが込み上げてきた。

## 方向転換するキツカケと救いの手

13577号自分は本来暗い筈の周囲を照らす大きな塊状のプラズマ気体に熱や電気エネルギーを加え、気体の分子が解離して原子になり、さらに温度が上昇し原子核のまわりを回っていた電子が原子から離れ、(この現象を「電離」といいます)中性分子とプラスイオン、マイナスイオンが混在して非常に活性化した状態のことような光源に集められる風で、“スクール”で活動してもバレないようにと、被っているフードがバサバサと翻りそうなのを抑えずに、コンテナで溢れかえる実験場を見つめていました。

13577号自分が見つめる先には上条当麻・御坂美琴・一方通行の三名が遭遇し、あからさまに不穏な雰囲気を漂わせていました。…まあ、13577号自分が現在実験場を見ている位置的な問題で三名の間で行われている会話の一部はあまり聞こえないのですがね。

そんなことを考えていると、物理的な風向きが先程とは大きく変わり始めたことに13577号自分は気付きました。一方通行の絶対能力進化計画の大元を予測した樹形図ツリーダイアグラムの設計者学園都市が誇る世界最高のスーパーコンピュータ。今後25年は誰にも追い抜けないと判明している、超高性能な並列コンピュータで、正しいデータさえ入力すれば、完全な未来予測シミュレーションが可能。地球上の空気の分子ひとつひとつの動きまで正確に予測できるため、学園都市では天気予報は予報ではなく予言、確率ではない完全な確定事項として扱われていた。使用権限は上層部が握っており、特に暗部に踏み込みそうな事柄に関しては好き勝手に使えない。その性能故、様々な組織に狙われていて、安全確保のため人工衛星“おりひめ1号”に搭載されていた。七月二十八日、正体不明の高熱源体が“おりひめ1号”を直撃し大破している：別名超高度並列演算処理器アブソリュート・シミュレータによって、以前は完全に天気を予測することが可能でしたが、どうやら13577号自分が布束砥信といわれていた七月下旬辺りに大破してしまっていることから、現時点では天気の完全なる予測は不可能になりました。

まとめると、普通の天気予報になってしまったただけなのですが、今

回到限つてはその“普通”である筈の現象は些か一方通行アクセラレータを追い詰めるであろうということですよ。

「…ツチ、風の計算を誤ったか？」

その一方通行アクセラレータの発言通り、現在進行形で大幅に風向きは変化していることで一方通行アクセラレータの頭上に形取られている、プラズマになりかけているエネルギー光源が大きく揺らめいていました。例え一方通行アクセラレータが算出した解に誤差があつたとしてもここまで差が出るとは思い難いです。

考察としては、現在のようアクセラレータに一方通行がプラズマを形成することを前提に計算式を構成し、そこから算出された解までの過程に自然環境による $X \cdot Y$ が変数含まれていないとは思えません。

実際一方通行アクセラレータも即座にプラズマとして形成予定の光源に対して調整を入れていることから、想定自体はしていたのではないでしょう。

「なんだア？なにが起こつてんだ？」

それにやはり一方通行アクセラレータの反応を見る限り、本人も予想外の展開なんですよ。つまり自然的な想定外か、誰かの意図的な想定外が現在発生していることになりま。

可能性は低いですが、仮に自然的な想定外があつたとしてみましょう。その場合、急な気温の変化による気圧の変化によって一方通行アクセラレータが構成していた計算式内での風向きと、現在進行形で流れる自然の風向きが違ふことでの想定外が予想できます。

「俺の計算式に狂いはない筈だ…この不規則な動きはどオ考えても自然の風じゃねエ」

…不規則、ですか。一方通行本人が言うように、不規則であるというこ

とから自然の風ではないことが想定できました。では自然の風で不規則になる場合はないのかと言われれば、限りなくあり得ません。自然の風は大気の流れ、つまり天気予報などで公開される天気情報の大半は大まかな流れのみです。何故細かい情報がないのかは、十中八九他の大気の流れに掻き消されている可能性が高いです。少数派が多数派に呑み込まれてもがくように、ごく僅かな大気の流れは他の大気の流れに呑まれて消えてしまうのでしょうか。

「まさか…」

そう言つて一方通行は自身の頭上に形取つていた、プラズマにしよ  
うとしていた光源を音もなくかき消し、13577号の背後とも言え  
る上空を眺めました。そんな一方通行の行動に13577号は存在  
を気付かれたのかと、心臓が跳ねた気がします。

けれど一方通行と目線が合わないことから、まさかと思ひながら  
13577号の背後に位置する上空辺りに目線を動かします。

「待て…聞いたことがある。確か、発電機のモーターってのは特殊な  
…」

目線の先にあつたのは、恐らく…ぼんやりとしている輪郭を見るに  
風力発電だと思ひます。13577号は視力が良くないので目を凝  
らしても見えづらいですが、何故か風力発電のモーター辺りが放電現  
象のようなもので僅かに光っているので、何かあつたのでしょうか。

「このやろう…!!」

一方通行が目線に向けていた物体が風力発電だと瞬時に理解できな  
かつた分、一方通行の言葉を聞き逃してしまいました。しかし、  
一方通行が唸るかのような声で何かを喋つたことに気付き、再度会話を  
聞き取ることに集中を向け直そうとすると、一方通行が声を発した

先に10032号が立っていました。

「殺す…!!」

13577号は驚きで足場として立っていたコンテナの上で物理的に歩を進めてしまいましたが、運良く目線の先にいる人物に気付かれることはありませんでした。恐らく一方通行もかなり気が立っていたのでしよう。

それに何故…10032号は一度姿を眩ませたにも関わらず、再度この現場に戻ってくる必要があったのでしょうか。そして一方通行はプラズマを形成するのを中断したと思えば、何故殺意が籠った目で10032号を睨んでいるのでしょうか。

「やせると思う？」

御坂美琴が10032号を庇う為に前に飛び出て両手を広げます。

確かに妹達は一方通行の絶対能力進化計画の為に製造されたと言つても過言ではありませんが、一方通行自身に妹達への恨み辛みを殺意として表せられるとは思えません。

理由として考えられるのは一方通行の行動を阻止するような行動を起こした…くらいですが、形成されようとしていたプラズマを10032号一体で何とか出来るとは流石に考えられません。

一方通行はプラズマを形成する際に、恐らく高気圧に籠った熱エネルギーが気圧同士での粘性摩擦空気などの気体同士の僅かな粘性によつて、移動するときにはまわりの空気との間で摩擦が発生する現象のことによる熱エネルギーを利用して、気体の分子を解離させて原子にし、さらに熱エネルギーを加えて原子核の周りを回る電子を電離させていたと思われます。

…その後一方通行の計算式上に含まれていなかったと思われる程

の大幅な風向きの変化、それに対して一方通行はプラズマの形成を中断してまで風力発電を見ていました。

つまりここから切り取れるキーワードは……高気圧・風向きの変化・風力発電・謎の放電現象・10032号への殺意の計五つです。

「はっ、頭に乗ってんじやねエぞ格下がア。オマエじや俺に届きやしねエよ。」

まさか……風力発電のモーターで起きていた放電現象、……レディオノイズ欠陥電気能力的にはオリジナルの1%にも満たない程度、実力は2万人集まってもオリジナルに敵わない程度は妹達同士で個体差があるとは言えど、製造番号が三桁以上に達している個体であれば一定の電磁波を放つことが可能です。ですが10032号一体では不可能……いえ、だからこそこの場を一度撤退したと考えれば話は通りま  
ね。

つまり10032号は近辺にいる妹達シスターズに対して“ミサカネットワーク”越しに救援を求め、他の個体がそれに応じたんでしょう。学園都市に数え切れない程設置されている風力発電の中から、この現場周囲の風力発電を算出して、それぞれ応じた個体が風力発電のモーターに対して逆流させる為の電磁波を流せば不可能ではありません。

学園都市で使用されている風力発電の種類は水平軸風車風力発電と言われて一番に出てくるであろうプロペラ状の発電機で、正面からの風でないかと回転しない。他にも垂直軸風車などがあるが、発電効率が悪いことや場所を取るのあまり使用されないなので、無理矢理電磁波によって逆回転することになっても台風などの自然災害への耐久性によってある程度の可動は出来るでしょう。そしてそれらの風力発電は常に風上に向くように設計されています。

「視力検査ってなア”2.0”までしか測れねエ、それと一緒にア。学園都市には最高位のレベルが5までしかねエから、仕方なくここに甘んじてるだけなんだっつーの」

一方通行は御坂美琴が自身を止められるだけの力量がないことを理解しているのか、御坂美琴の真横を歩いてその後ろに立っている10032号へ向かいました。

風上から降りてくる高気圧を受けて発電しているの、一方通行はそれを利用したかもしれませんね。とにかく、本来風上から降りてくる高気圧の風が風力発電が逆回転することによって低気圧として膨張しようとする作用を若干妨害する形になります。

「手を…出すな…」

簡単にまとめると、無理矢理風力発電を逆回転させると風の流れがグチャグチャになります。恐らく一方通行は風力発電が逆回転していない状態での計算式だったからこそ、それを妨害してきた10032号を殺意が籠った目で見ていたと、いうことですね。

一連の会話の中で再度上条当麻が一方通行に対しての妨害を試みていました。その身体は一方通行以上に満身創痍であるにも関わらず、両足で立ち上がる姿に御坂美琴は空いた口が塞がらないようにでした。同様に一方通行もその声に驚いたと同時に軽い警戒体勢を取っていました。

「ソイツらに…手を出すな…!!」

「…はっ、面白れエよオマエ」

自身の身体状態を鑑みないで歩き出す上条当麻の姿に一方通行も僅かに怯みながらも、上条当麻の言葉に対して反応を返しました。

「最高に面白れエなア!!!」



一方通行は半ば叫ぶように言葉を発しながら、左足で一步目を踏み込んで上条当麻へ接近して攻撃を試みました。力の向きを調整された走り出しと速度のまま、レールの上を駆けながら両手を上条当麻に向かって伸ばしました。

そんな一方通行の目は幼い子供が憧れの何かを見るかのように輝いていて、13577号には一方通行が伸ばしたその両手が救いを求めたように見えてしまいました。

一旦左腕を引いて右手を前に出して飛びかかってくる一方通行に対して、上条当麻はその顔に静かな怒りを宿しながら一方通行が伸ばした右手をしゃがんで躲し、それに気付いた一方通行は引いていた左腕を前に出して上条当麻を殴ろうとしました。

しかし、上条当麻は自身を殴ろうとした一方通行の不慣れた拳を右手で軽く受け止め、そのまま拳を右手で振り払って一方通行の勢いを相殺しました。操作した筈の力の向きを、上条当麻の右手によって相殺された一方通行はかなりの隙を晒します。

上条当麻はこの隙を逃さないとばかりに、左足で大きく踏み込んで一方通行に飛びかかりながら、自身が学園都市に来る理由になった右手を強く握ったまま、こう言いました。

「(歯を食いしばれよ)最強”、俺の”最弱”は)：ちつとばつか響くぞ!!!」

瞬間殴った時の痛々しい音が僅かに鳴り、その後を追うかのように一方通行の身体は大きく転がり回りながらレールの上を後退して、1

0032号を庇うように立っていた御坂美琴オリジナルより少し手前辺りで仰向けのまま意識を失いました。恐らく原因は殴られたことによる脳震盪を伴う気絶だと思われました。

そして一方通行アクセラレータを殴った上条当麻本人も、緊張やら極度のストレスによる興奮状態で立っていたのか一方通行アクセラレータが気絶した直後に失神する、という形で上条当麻と一方通行アクセラレータの争いは一旦終止符が打たれることになりました。